に優秀であり、又水上無敵軍と云はれて居るのは、疊の生活が關節運動のより大きな自由度を要求する結果でなからうかと思はれる。斯樣な事を申述べると限りが無いのでありますが、過去を振返りながら現代を見又將來を眺める時、獨り日本と云はず、世界の文化を支配して行くものは、先程申上げました或點に於て人間の實生活から游離し得る科學の進歩、科學の世界が最も重要な要因と思はれるのであります。吾々の生活は行燈からランプ、ランプから瓦斯燈、瓦斯燈から電燈、電燈からネオンサインと、其照明に關するだけでも次々に進んで行くのであり、そして、行燈時代の感覺は瓦斯燈時代のものと異り、瓦斯燈時代のものは電氣時代のものと違ふ事は現實の事實であります。斯樣にして時代と共に違つて來る感覺は凡ゆる人間の世界の中に擴散しないではゐない。それは丁度一滴の油を水に落した如く擴がつて行くのであります。

斯くて人生と世界とは息む時なく創造されて行く。日に月に新にして駸々乎として進むものは實に人生であり世界であり、生活も、道德も、宗教も、政治も、人生と共に移り行く。洵にこれ生々流轉の諸相であります。

六

最後に私は再び人生觀に還つて一二の事柄を申上げたいと思ひます。一體人の世が樂しいものであるか又悲しいものであるか、善であるか又惡であるか、さう云ふ樣な事柄に就いて、生物學は直接には何の批判をも與へない。唯その存在を在るがまゝに認める。然し乍らその存在する人の心の動きも亦事實である、存在である。從つてそれも亦在るがまゝに見て行かなければならぬ事は、既にレーニンの宗教否定の項に於て述べた所でありました。然し乍ら人の心の動きと云ふものは、夫々の狀態に於て變化する。嬉しい時は嬉しく悲しい時は悲しいのである。然し乍らその悲しみ或は喜びと云ふものは二つの全く異る心の動きではなく、一つのもの〻二つの現はれである。愛と憎しみ、好きと嫌ひ、熱と冷やかさ、丁度夜があるから晝があり、動があるから靜があり、迷ひあるが故に悟りがあるのと同じである。であるから眞に大いなる惱を體驗し得ないものは、眞に大いなる慰めを得る事は出來ない。又眞に大いなる憂ひなくして眞に大いなる喜びを觀ずる事は出來ない。

であるから富める者は眞に富を知る事は出來ない。心貧しうして初めて富を知り得るのである。實にそれは一念三千の姿である。こゝに人生の感激があり、絶えず新たなる世界へ人生を押し廣めて行く。實に人生を見、世界を見んとするものは、人生の凡ゆる過程を、卽ち極樂を又地獄を肉眼的に顯微鏡的に、而して又望遠鏡的に眺めて行かなければならない。而してそれを眺めるには熱意と努力が要るであらう。

この努力と云ふ事について私は常に考へて居る人間的能率主義と云ふ事を最後に申述べて置きたい。能率主義には二つの範疇がある。一つは機械的能率主義一つは人間的能率主義である。從來の能率主義はこの二つの主義の混交する處に誤謬があつた樣に思ふ。機械的能率主義とは消極的能率主義であつて、機械の如く惜しみ惜しみ使ふのが最も能率がよいのであるが、人間的能率主義は積極的である。使へば使ふ程よくなる。玉磨かるゝ事によつて光を發し、凡ゆる體驗と試練とが人間をして向上せしめる。惜しみ惜しみ使ふのでなく、惜しみなく使ふ事によつて向上する。それは丁度凧が風に抗して揚るのと同じである。要領よくやると云ふ事は、二點間の最短距離を行く事である。かやうに解釋するの

は機械的能率主義から來る錯誤であつて、人間的な能率主義は、急がば廻れである。二點間の最長距離を行き得るならば、それは又同時に二點間の最短距離を行き得るものであるその理論は、大いなる憂へ無き者に大いなる喜びが無いのと相似である。實に無功德にして初めて功德がある所以である。

以上甚だ判りきつたこと申述させてもらつて恐縮の次第であります。尙又世界觀が主として人生觀に止まり、世界觀への發展が不充分であつたことに對し御諒承を得たいと思ひます。〔昭和十一年十二月二十日東京放送局ニテ放送〕

三、日本科學の一斷面

一四、學士院授賞式參觀所感
一五、日本醫學にノーベル賞に値するものありや
一六、現日本生理學の一二の問題に就ての考察
一七、神經麻痺部の興奮傳搬に就ての諸學說
一八、醫學の學位果して低下したか

一四、學士院授賞式參觀所感

偶々今年(大正十三年)の學士院授賞式に參列するの光榮を得たから其所感の一端を記して見よう。學士院賞といへば先づ日本のノーベル賞といふ譯である。苟も學に志すものに取つて授賞は誠に名譽の事である。日本人でノーベル賞を得た者は未だないのであるから今の處此國の學者の最高榮譽である。今年は第一部に四名、第二部に七名、都合十一名の受賞であつて、內恩賜賞二名、院賞四名、大每東日御成婚記念賞三名、桂公記念賞一名でその數の多い事全く從來の記錄を破つてゐる。扨て授賞者業績の內容であるが、第一部の方は私にはわからないので、此方面に就ては特別の所感もない。第二部の方は清水武雄氏の放射線の研究に使用する膨脹器の研究以外のものが殆んど總て生理學に關係淺からぬも

のであつたといふことが私には特に感慨が深かつた。又それが爲めに是非參列して授賞理由の說明もきゝたく思つたのであつた。又近くは英國の若い生理學者エ・ブイ・ヒルがノーベル賞を得たのと對照して少なからぬ私の興味をそゝつたのである。先づ第一部に於て院賞を贏ちえた左右田博士は、其專門が主として經濟哲學の方面であるが、氏は昨年『思想』の正月號に於て合目的性の事に就てかなり長い論文を發表され、その內容が多く生物の合目的性といふことを取扱はれて居られる。これは又生理學の認識方法論上の問題として目下少からず勃發しつゝある思想傾向と因緣淺からぬことが、殊更私の興味をそゝつたのであつた。

左右田博士の業績として院賞授賞の對象となつた業績は（一）貨幣と價値（一九〇九獨文）と（二）經濟法則の論理的性質（一九一一獨文）の二論文で、それは寧ろ二著書といつた方が適當であらう。私は之に對しては勿論門外漢に過ぎないものであるから、元より充分の理解は出來ぬが、後の著書に於て博士が經濟學の論理的性質殊に經濟法則の意義を評論するに當つて（一）吾人の論理的要求として普遍化概念の外に個別化的概念を認め、そ

れより（二）經濟學は演繹體系をなす自然科學であるかそれとも個別化的概念に立つ歷史科學なりやの根本問題を論じ、更らに（三）經濟法則は因果法の意味に於ての法則であるか、若しそうでないとすれば歷史的科學に於ても法則といふものが存し得べきか否かといふ事を論じて居られる。此問題と連關して、生理學は果して文化科學なりや自然科學なりやといふ問題が近頃論じられてゐるが、後の論爭は勿論前の論爭に啓發せられて起つて來たものである。然し兎に角、經濟學とか生理學とか心理學とか云ふものが、自然科學と文化科學との中間に介在するように思はれてゐるといふことは興味がある。十九世紀初期にブントの分類した科學分類は自然科學と精神科學とを對立せしめたものであつたが、爾來學問の分類は研究對象よりも先づその認識方法論上の問題が主であるとの見地から、所謂獨逸西南學派のウインデルバンドやリツカート等の人々は、普遍的法則定立的な自然科學には價値關係的の文化科學を相對立せしめた。左右田博士は勿論西南學派に屬する人であるから、上記の諸考察は元より其のアプリオリが博士の獨創にあるのでないが、少くもそれを經濟哲學の、即ち理論經濟學の分野に持つて來て此根本問題を論じた處にカール、メ

ンガーが敢て賛辭を惜しまなかつた所以があり、實に日本人の爲めに萬丈の氣を吐くものである。兎も角門外漢たる私にはもとより會得し盡されぬ處ではあるが、悟性の究竟の限界、一切認識の發足點といふような第一線の問題に觸れてゐるといふ點だけは理解が出來て愉快に思はれる。

次に第二部に於て恩賜賞を贏えた佐々木博士は私に取つては舊師であり、爾來直接間接教を受けて居つたといふ點からでも私には喜びであつた。蛋白質の問題乃至それを構成する「アミノ酸」の合成といふような問題は、今の處かなり行きつまりの感なきに非ずである。逆に又それ程困難の問題とも見られる。勞多くして効少なしといふ意味が多分に含まれてゐる。先づ一寸實驗室の空氣に觸れて學位でもといふ人々には向かぬ問題である。博士の十幾年の業績が茲に酬ゐられた譯であるが、私から云はしむれば單にそれだけではなく、民間の一佐々木研究所と云ふものゝ權威に對して大に氣を吐くものである。病院經營で金でももうけるといふような事はあまり感服しない事だ。金をもうけるならもつと氣のきいた方法もあらう。然し一個の杏雲堂病院の利益といふものを眼中に置かずして、其附

屬研究所につぎ込んだといふことが更に意味があるのだ。少なくも其志の程を窺ひ知る指標とならう。研究とさへいへば從來はその背後に國家的保護を豫想せられなければならなかつた狀態に鑑みて、一私人の研究所を中心として此立派な業績は民間の研究のために萬丈の氣を吐くものである。

川村博士の生物體内に於ける類脂肪殊に「コレステリン」に關する研究は、單に博士專門の病理學の分野に於て所謂脂肪變性の問題に新光明を投げ與へたに止まらず、更らに生理學生化學の分野に押し廣めて脂肪新陳代謝に關し貢献する處尠からざるものがある。誠に博士が眞に篤學の士にして十數年來一つのテマを中心とし研究是倦まなかつた心事がうれしく思はれる。現象は無限に多相であるが、之を支配する法則は必ずしも多相ではない。小問題と雖ども濃縮し穿鑿し極くせば行く所凡ね相等しいと云ふ感じの起るのは學に志したものの屢々覺り得る處である。多く知るものは結局何も知らぬのと一般であるといふのは此邊の消息である。此點に於て日本の學者若しくはその卵がも少し十年一日の如く一つの問題を研究するといふ態度を養ふ必要がある。だがあまり學的常識の缺けて居る專門家

といふものも感服が出來ぬけれども、そうした眞摯の態度をとる人が輩出するのでなければやはり獨創的の仕事は先づ出て來ないと思ふ。それについて思合はせる事は、大學院乃至研究科の指導教授といふ制度の可否である。現下の制度では各官公私立の大學が夫々大學は學術の蘊奥を極むる處といふわけで、大學院とか研究科とか云ふものがあつて、こゝに席を置いて研究する者は指導教授の指導を受ける。指導教授なるものは腦漿をしぼつてテマを考へる。それも一つや二つならまだよいが、多い處になると四十五十は愚か、研究生が七十人を越える教室などがある。此の制度はやがて日本人の頭腦に芽生へんとする獨創性を相殺すると共に、學に對する眞摯の道念を否定する傾向を生むものに非ずやと案じられる。醫學の方面のアルバイトには量よりも質を考へたくなる。百尺竿頭一歩を進めた獨創的のものを產まねばならぬような氣持が頻りである

然しこれに關しては見方の相異といふ事もあるが、茲に述べる鈴木博士高橋學士の「ビターミン」に關する研究は慥かに尊いものである。それは獨創的な匂ひがある爲めだ。只惜しむらくは此の「ビターミン」といふ横文字の響が吾等の頭に響き過ぎてゐるのだ。實

に「ビターミン」の命名者フアンク(米國)は鈴木博士の研究に遲るゝ事一年で、而かも彼が此名稱を與へたる事により、その横文字の名稱の響が世人の頭にしみこみ、そのアプリオリをうばはれた感のあるのは愛する日本の爲めにとめ度もなく殘念の感が迫つてくる。ひとり鈴木博士の業績のみではない。一九〇四年我が長岡博士の原子核に關する獨創的見解も實に又此れと同一徹を踏んでゐるのだ。

「ビターミン」の事に關しては周知の事で、茲に喋々の必要もない、高橋學士の分離した「ビターミンA」は今廣く天下に「理研ビターミン」として賣出されてゐる。然しこれは純日本人の仕事である事を忘れてはならぬ。理研十三年度の研究項目を見ると、鈴木博士の研究室は「ビタンーミABCD」で埋つてゐる。益々日本の爲めに氣を吐いて頂かなければならぬ譯である。

最後に田代博士の「バイオメーター」に就て一言しよう。それは氏の著 Chemical sign of life に網羅されてゐる。京大生理の北村博士が夙にこれが再試驗と若干の改良とを試みた事を思浮べて感慨新たなるものがある。業績に就ては言を弄する迄の要もない事であ

る。だが、田代博士の仕事はアメリカで行はれた。日米の間、暗雲或は拭ひ去られぬ程のものあると雖へども、學問に國境はない。私は今それを云々するのではない。只日本に早く國家的保護を要せぬ民間の自由研究所が出來ればよいと待ち望むだけだ。第二の田代第三の田代と、その卵は多分に持ちあはせてゐる筈だ。只そういふ自由研究所がないが爲めに、亞米利加まで渡つてやらなければならぬといふ事には、必ず何程か恥辱を感ぜねばならぬ筈だと思ふだけである。

以上が式場に腰かけ乍らの所感の一端である。兎も角も授賞者の多かつた事、左右田博士、佐々木博士、田代博士、鈴木博士の樣な民間的色彩の人が授賞されるまでに到つた日本科學の發達過程に對する考察、將來への豫想、希望、光明、愛國心、獨創力等といふような斷片的の想構があわただしく腦中を去來するものがあつた。

（大正十三年七月五日日本醫事週報掲載）

一五、日本醫學にノーベル賞に値するものありや

前年末であつた。或雜誌社が知名の學者に標題の事柄に就ての解答を求めた。其の結果は既に發表されたと聞いて居る。斯かる問題がジヤーナリズムの一つのテーマとなつたことは何を示すであらうか。日本の科學的水準の高さを物語る以外のものではない。元來ノーベル賞の審査は物理、化學、文學に關する方面ではスエーデンの王立學士院、醫學の方面はストツクホルムのカロリンス醫科大學が引き受けて居るのであるが、一方汎く推薦者を世界に求め、世界中の大學教授、大學者及び過去のノーベル受賞者の意見をも徵して居るのである。

今溯つて何十年に亘る日本醫學の全領域にノーベル賞に値する如き如何なる業績がある

かを求める事は、一人の知識では出來ない。若し尋ねる問題がそれであるとするならば、其の解答は既に與へられて居る筈である。何となれば我國學術の最高峰である帝國學士院は其の事業の一つとして明治四十四年以降、毎年優秀なる學術上の業績に對する授賞を行つて居る。從つて若し單に日本醫學の領域に於てノーベル賞に値するものを求めるのであれば、其處に擧げらるべきものは右の受賞業績以外にあるべきでない。問題は「如何なる事態」がジャーナリズムをして此の問題を捕へしめたかの消息にある。だとすれば、ここに顧みて他を云つても強ち惡くはあるまい。

ジャーナリズムが如何なる事態に依つて斯かる問題を捕へ來つたかに就ては少くも三つの理由を擧げ得ると思ふ。第一は我國の學術が(ここでは主として自然科學方面を指す)、辛く歐米の夫れと同一水準に達して來た事を意味する。當然の結果としてノーベル賞と云ふ世界的學術賞への注目、野心、而して推薦運動と云ふべきものが現前しはじめたと解せられる。次に第二の理由はジャーナリズムの對稱であるインテリ大衆の科學への理解が向上して來たことを物語る。科學と生活との干渉、國家の躍進過程と科學との關係は、大衆

をして科學常識の向上、更に其の批判にまで誘導する。遲くはあるが、當然の過程として喜ぶべき現象であらう。

次に第三の理由は、ここ數年殊に滿洲事變以來國際聯盟の脫退、海軍々縮會議と、我國の國際的位置の向上につれ、國民精神が著しく作興すると共に、國民的自覺が凡ゆる方面に擡頭し、其の一つの現はれが國境なしと云はれる科學方面に向けられた時、彼我一對一であるべき筈のものが、三五對零(此の數はノーベル賞が一九〇一年に始るから一九三五年までを意味する。但し物理、化學、醫學、文學及び平和賞の夫々を一單位とすれば、一七五對零となる。但しものにより授賞すべきもののない年もあり、從つて此の數は概數である)であると云ふことは、一等國たる日本の國民的矜持を傷ける事夥しい。從つて第一の理由とは外面は類似ではあるが、內面的には全く別個の觀點から注意を惹いたものと思はれる。

以上の內第二第三は差當つて論議する必要を認めない。先づ顧みるべきは第一の、卽ち我國の科學は歐米の夫れと同一水準に達したか否かであらう。夫れはノーベル賞に値すべ

き業績の生れ出づべき母體として、又科學發達の史的段階として必要な事柄である。併し乍らこれに關しては、各分野の異るに從ひ更に又觀る人の觀點に依つて意見の相違がある に違いない。醫學に關する限りの卑近なる一二の引例をも敢てして少しく述べて見やう。

歐洲戰後卽ち大正七八年の頃である。リンガー液を作る鹽類及び葡萄糖が著しく騰貴した事がある。これは獨逸からの藥品輸入が途絕えたためで、實に葡萄糖一ポンド二百數十圓と云ふ馬鹿々々しい値段に達した事は、身にしみた記憶である。當時これでは到底一等國とは云ひ得ないと思つたが、其の時と今日では、我國の科學は著しく躍進し、大に事情を異にする。併し、今日でも尙優良なる顯微鏡、比色計X線裝置、アイトーベンの磁電流計等の醫科機械は一として舶來品ならざるはない。殘念であるが、事實であつて見れば致し方がない。

昭和九年の我國貿易額は實に五十億を突破して居るが、科學の分野を眺める時は徒らに有頂天になる譯には行かない。然し乍ら、科學機械化學藥品等の問題は實を云へば大した問題ではない。何となれば絕體に出來ないと云ふ譯でも無いからである。歐洲戰後サルバ

ルサンの輸入が途絕えた時、時を同じうして三人の學者の手に別々に代用品が作り出された事は周知の事柄である。所謂「必要は發明の母」である。一方軍需機械等國防に直接關係するものに於ては世界的に優秀な戰艦、潛水艇、航空機等が製作され得るのであるから何等か國家的援助を受け得る條件に置かれれば作り得るだけの境地に達せることは疑ひない。例へば理化學研究所の如き、必要に迫らるれば、曩に擧げた醫科機械を製作するだけの能力はあるであらう。歐米人は日本人には摸倣能力しか無いと思つて居る。ヒトラーは若し廿年間日本をして鎖國せしめるならば、日本は科學的獨創力の無い爲に時代に遲れて自滅すると豪語して居る。しかしこれは實に日本に取つては有難い認識不足である。今日吾々の生活と最も密接な關係のある電氣はイタリーの生理學者、ガルバニーと其の論客ポルタに出發することはガルバノメーター、ボルトメータに傳へらるるが、夫れとて近々三百年を出ない。千年前にモートルを、百年前にグライダーを考察したのは何れの國人であつたか。

日本人には決して發見發明等の科學的獨創力が無いのではない。それが蔽はれたのは結

局明治維新に至るまでの國内的事情にあつたのである。此の故にこれを明治以後の情勢に照して一般民衆が科學に對する理解の少なかつたこと、又科學にたづさはるもの自身が獨立した科學的イデーを持たなかつた事は事實である。日本の科學には哲學が無いとはまゝ云はれる言葉であるが、これは換言すれば、科學的イデーが無いと云ふ事である。併し乍ら、これも我國の科學發達の歴史を顧れば無理も無い事である。

科學體系未だ整はず、科學の思想尚普及せざる處に科學的イデーの起り得る道理が無い。併し乍ら、これ又前述する發見發明の能力と共に、缺如するのではなく蔽はれて居たのである。凡そ歴史なくして一切の能力は發現しない。吾々は日常無意識に立ち、歩み、又走る。併し乍ら、これは實に生後一年に近き乳兒時代に這ひ、立ち、歩み、走る不斷の練習努力に得た處に出發する。ヒツトラーの批評は現實を見て未だ歴史を觀ない。

扨て、顧て他を云ひ過ぎたから少しく標題の問題に入らう。併し、既に述べたやうに日本に於ける醫學的業績にしてノーベル賞に値すべしと見做さるるものは、學士院の授賞業績以外に差當つてあり得るとは思へない。だが、彼の化學者ジュールの如く、不朽の業績

が其の時代の學者にすら問題にせられないことがあることはまゝ見る處である。

帝國學士院が明治四十四年以來授賞した醫學方面の業績は、恩賜賞及學士院賞を併せて今日まで十六回、年代順に擧げると富士川醫文學博士の日本醫學史を筆頭に、

高峰讓吉、田原淳、野口英世、稲田龍吉(井戸泰)、桂田富士郎(藤波鑑)、山極勝三郎(市川鴻一)、布施現之助、清野謙次、佐々木隆興、川村麟也、勝沼精藏、加藤元一、足立文太郎、三宅速、平井毓太郎、今裕博士等

である。若し之に桂公爵記念賞、大毎東日賞、更に日本學術協會賞を加ふれば、候補優良業績は更に多くなるであらう。又學士院の授賞は重賞されぬらしいから、既受賞者の其の後の優れた業績、例へば佐々木隆興博士の特殊化學食餌による惡性腫瘍發生の研究の如きは、大正八年癌の研究によつて院賞を得た山極博士の業績にも優るとも云はれてゐる。

扨て、以上に擧げた諸業績の内容に關しては勿論こゝに再現する必要を認めない。だが一見して氣の附く事は先づ第一は夫等の受賞業績が前述せる日本科學の發達過程の縮圖である事を如實に示してゐる事である。富士川博士の日本醫學史は特別であるが、初期の受

賞業績、卽ち高峰、田原、野口博士等の業績は、何れも日本に於てなされた業績ではない。勿論日本の言葉を以て日本の學術雜誌に發表された業績でもない。

外國に於ける科學發達の歷史とイデーと體系と、而して研究機關とを背景として初めて蔽はれたる日本人の天分が或る程度に發揮された事を物語るのである。其の後の業績と云へども、淸野博士の生體染色の研究の如き、アショッフ敎室從つてアショッフのゲダンケンガンクを除外して完成されたか否かは疑問であると云ふ人もある。然し之は夫等の業績を非難する意味ではなく、科學に國境あるかの如きは今日の情勢に於て、斯かる觀方も亦當然起り得るのである。言葉と文字、之れは實に民族と共にある處のものである。日本の自然科學の獨立とは、其の業績が日本の言葉、文字、而して日本の科學發達の歷史とイデーと體系と研究機關とを通して行はれる時、つまり彼我一對一、又は夫れ以上になつた時である。日本の業績を殊更外國文字で發表せねばならぬ必要が何處にあらう。業績にして眞に價値があれば、夫れは國境を越えて自然に光る。思ひ出されるのは一九〇四年のパヴロフがノーベル賞を得た業績は悉くロシア語で發表されてゐたので、夫れ迄世界の生理學者

は知らずに過ぎてゐたのであつた。

次に第二に氣のつく事は上記の業績に生理學の業績が少い事である。ノーベル賞の第三部は本來生理學及び醫學である。此の事についても醫學發達の歷史と關聯して述べたい事があるが、長くなるから割愛する。昨年の夏ソ聯で萬國生理學會があつた折、加藤元一博士の單一神經纖維に關する研究（之れは同氏の旣受賞業績とは連關はあるが問題の核心は別個である）がノーベル賞にも値すべきものとしてパヴロフ敎授の推賞を受けた由は新聞の傳ふる處であつた。此の業績が完全に和製である點は大いに推賞して可なりである。

生理學方面では新潟醫大福原博士の腹窓法及び之れを基礎とする諸實驗の歸結、東大橋田博士と其一黨のベルンスタインの膜說を覆す實驗、滿洲醫大元敎授久野博士の二十年來の發汗の研究、倉敷勞働科學研究所暉峻博士と其一黨の研究、東北醫大佐武敎室廿年來の業績等々何れも諸外國の業績に比較して相等體系の整つた研究と云へるであらう。醫學全般に涉つては淺才にして知る處甚だ少い。

東大田村博士のビタカンファー、吳博士の脊髓副交感神經說等は其後否定說を聞かぬで

もない。更に治療方面に連關するものとしては矢追博士の天然痘免疫に關するもの、或は森田博士の森田式神經衰弱療法等は其想構が實に東洋的なる點に於て一部の激賞を受けてゐるやうである。專門外の事は只自らの無知を暴露するに過ぎぬやうであるから筆を擱く事にする。

最後に一言を費して置きたい。前年日本の醫界に二つの問題があつた。一つは醫業の業態に關する問題、一つは「日本醫學」なるものゝ擡頭である。前者に關しては茲では問題外であるが、後者に關しては筆者が他の雜誌にも發表したやうに、之を以て日本の醫學の獨立宣言であると見做す事が出來る。夫は日本に於ける醫人の醫學に對する理念がこゝに初めて歐米の分析知に出發するイデーを止揚し、東洋的な綜合觀が加はつて獨自なる日本醫學の體系を作る理念的な基礎が置かれたと見做されるからである。理念の上では一つのコペルニクス的な轉回の萠芽と見て差支へがない。筆者は前年『近世日本生理學思想史論』なる一小著を物するに當り、日本生理學が理念的に獨立したと見做さるゝに至つたのは實に一兩年であり、其一つの現はれとして東大橋田教授の「全機性說」を引例した。再言す

るが日本科學の獨立とは其理念と體系とにアプリオリーなものが出來、而して自らの言葉と文字と研究機械とによつて獨自な業績がなされる事である。其時日本人の蔽はれた科學的才能が眞個に發揮される。其時ノーベル賞に値する業績が恐らく陸續として現はれるであらう。

今や日本は第二の高峰、野口、田原を其內地に於て育て得るだけの素地がどうやら出來かかつた。岩波の「科學」が五千の讀者を有する事は、日本の科學的水準を示すものである。昭和八年日本學術振興會が設立され、年々七十餘萬圓の研究補助がなされるやうになり、科學研究への奬學資金も年々增加しつゝあるは識者の理解の向上によるのである。一つ一つ日本人の蔽はれた科學的天分を啓く資料である。今や世界の動きは民族的であり、各民族の科學力、經濟力、繁殖力並びに民族的氣魄は打つて一丸とした一つの力として卽ち全機的に動き、眞の國防力は科學の總動員の下にのみ其力を發揮し得る今日、科學への關心は愈々深くなるであらう。(昭和十二年一月讀賣新聞寄稿)

〔附記　本文發表後佐々木隆興博士が再度の恩賜賞を拜授されたことは慶賀にたへぬ〕

一五、現日本生理學の一二の問題に就ての考察

一、序　論

大日本生理學學的も茲に第十五回大會を迎へる運びになりました事は洵に御同慶の至りであります。

扨て、本生理學會には從來未だ見られなかつた表題の如き報告を許された事に對し、私は先づ當番幹事たる暉峻所長に厚く御禮申し上げ度い。日本の生理學會は私が斯くの如き問題を考察すると否とに拘はらず、日に月に新たにして駸々乎と進んで居ります。從つて斯かる問題は評議員會の一話題にしか値するものでないとも考へられるのであります。け

れども年齢と思想とは一定の關係がありまして、若き學徒の思想は一般に進歩的であり、又其自由度が高い。私の考への如きはありふれた普通の考へ以外に何等の新奇なるものはないのでありますが、斯かる機會に於て本問題をデイスカスする事は、又日本生理學界に取り又本會に取り必ずしも意味のないものでもないと思ふ次第であります。

二、論文用語及術語の問題

本論に入ります。先づ第一に文字及び用語の問題から入ります。此の事はひとり生理學の問題とは限らない。もつと廣汎な科學一般の問題なのでありまして、到底一朝一夕に解決する如き簡單な問題ではないのであります。ではありますが、一國の文化の獨立と云ふ立場から致しまして、此の問題は甚だ重要であると共に、實際に於ても亦歩一歩と進めて行かなければならぬ問題でもあります。でありますから、これを日本生理學に限局しても考へ得られる事であり、又夫れを實際に取り運んで行かなければならぬものでもあります。

そこで直ぐに實際問題に入ります。今日日本に於ける生理學の業績は、一部は邦文、一

部は歐文を以て發表されて居ります。その事の良し惡しは別と致しまして、斯かる過渡的な現在の狀態が果して何時まで續くものでありませうか。私の考へまする處では勢々後半世紀位、實際はもつと短く、今後卅年又は廿年位でないかと思はれるのであります。それは、この國の文化發展の當然な若くは必然的な經過であります。當を得ぬ引例かも知れませんが、例へば我國の科學の最高峰と見做さるゝ恩賜賞或は學士院賞等の業績は、其初期に於ては、例へば、野口、高峰、田原氏等の業績の如く、外國になされたものが多く、其の發表も勿論、歐文を以てなされて居ります。然るに今日ではそれ等の業績が漸次國內に於てなされ、又邦文を以て發表されるやうになりました。それと同樣に、日本生理學の業績も恐らく段々と邦文を以て發表される事になりませう。これは一國の文化發達に於て當然なる道程であります。若しも窮竟に於て到達すべき處が其處であるとするならば、吾々は成るべく早く其の狀態に到達したいと思ふのが當然であります。

一方學術論文を歐文を以て發表すると云ふこと、是れ又夫れ相當の意味を持つ事は當然であります。科學は一面に於て民族性を持つが又他面に於ては超民族的なものである事も

事實であります。その何れに偏するも誤りであります。過去一世紀の間に於ては、日本の科學の水準が此の點にまで顧慮する餘裕が無かつたに過ぎません。

其處で實際問題として現下のこの國の狀態に於て、どの程度が最も至當であるかと考へますに、私は原著論文は之れを邦文とし、一方モノグラフは之れを歐文とする。例へば久野教授(註一)や加藤教授(註二)の近業の如くするのが先づ最も良いのではないかと思ひます。斯樣に致しますれば、一面に於ては歐米學者の注意と批評とを得る事が出來、他面に於ては自國文化を促進するに都合が良いと思ひます。然し乍ら私の此の主張は外國語を排斥する意味ではなく、寧ろ近頃の學生の語學の素養の足らざる事に鑑みて、一層讀書力を養ふ必要は大いにあると思ひますが、唯日本文化の獨立と云ふ觀點から、吾々の原著論文はやはり邦文を用ふるのが當然であり、又先程申し上げた樣に現在其の方向に進みつゝあると思ひます。世界地圖の色別けが言葉の色別けに依つて定まると云ふのも嘘でないと思ひます。然し乍ら、私の主張は日本文化の自己陶醉に陷らんとする反動思想からでなく、科學發達の實際から出發して居るのであります。もつとも嘗てのポーランドの如く、ロシ

ヤに屬すればロシヤ語、ドイツに屬すればドイツ語を用ひざれば、處罰さるゝが如き民族は、哀れであるとも考へられますから、ナショナリズム的反動思想の影響が全くないとは云ひ得ませんが、思想は一つの流れであつて、ナショナリズムの次に來るものは當然インターナショナリズムでありますから、左樣な事とは係はりなく、科學發達の實際を主眼としたものであります。

文字に關連して、當然術語の問題が起ります。之に就ては多くに觸れる餘裕がありません。又此の問題は既に橋田教授に依托し又教授に依つて纒められつゝある處でありますから、兎や角云ふべき筋合ではありません。尤も之に就ては一方には久野教授が昨年評議員會に主張された樣に、アジアの盟主としての日本文化の進出のためには、漢字の術語を用ふる事が好ましいと云ふ政治的な主張、他面にはなるべく「やまと言葉」を活かしたいと云ふ國語擁護派の民族的主張、更に又能率主義的な見解から、視覺聽覺等甚だデイテールに渉つて深く廣く論究せられて居ります事は結構至極であります。此の事は學問上の事でありますから、勿論絕對的に他を拘束する事は出來ないと共に、人生は一つの創造である

から、言葉の意味、從つて用語も亦時と共に進展する。只既に茲に學會としての團體があるのでありますから、吾々は多くのエキスパートの苦心して決定された處に忠實に從つて行きたいと考へて居ります。

三、日本生理學の概觀

以上は生理學と限らず日本の科學一般にも適用される事でありますが、次に日本生理學を概觀して一、二の問題を考察したいと思ひます。之には多くの問題があるのでありまして、此席では到底其の多くに觸れる事の出來ぬのを遺憾に思ひます。先づ生理學と云はず一般に科學の發達は一面には其の歷史的な根據、他面には人物、更に又制度、機關等、所謂研究上のオルガニザチオンが重要の關係を持つものであります。とは申しましても、其歷史人物及オルガニザチオンは之を嚴密に區別する事は出來ません。例へば、天才が歷史を作ると共に歷史が亦天才を作るとも觀られる。私は昨年「近世日本生理學思想史論」(註三)と題する小著をものしまして、皆樣の御批判を得、此學會の終了すると共に其の決定

稿を刊行するつもりで居りますが、私は其の際輓近に於ける日本生理學の史的展望、學的體系、學的認識の問題及び其の業績、新興學說及び夫れと思想との關係を顧みまして、日本生理學の發達が其の關係する處甚だ廣く、之を一律に論ずる事の至難である事を觀察しました、で、此席では日本生理學に於ける制度及び機關、卽ち其のオルガニザチオンに就てだけ申し上げます。

扨て此生理學の制度及び機關には、今の處大體二つあります。一つは大學の如く教育が主眼になつて居るものと、本勞働科學研究所の如く研究が主眼になつてゐるものであります。夫等は官公私立の區別はありましても、何れも夫等を擴大强化する事が今日日本生理學の發達を企圖する上に於て望ましい事であるは當然であります。而して其發達は人に待つ處も多いのでありますが、制度も亦重大な關係があります。例へば今日の學位制度の如きは、醫學に關する限り、一面批難がないでもありませんが、之を全般として眺める時、夫れが學の進步を招來する事にあづかつて力ある處少くないと思ひます。

研究制度と限らず、教育制度に於ても生理學は、現在帝大は二講座制で、滿洲醫大を除

く他、何れの官公私立醫大も一講座であります。私は現在の科學一般に於ける生理學なるものの位置に鑑みまして、夫等は夫々少くも一講座を增加すべきものと思つて居ります。私の主張は一般に醫大の解剖學が三講座であるから生理學も亦三講座にせよと云ふ樣な狹い意味でありません。今日の生理學とは、自然科學に於て物質現象を取り扱ふ物理科學に對し、生物現象を取り扱ふ生物科學の理論的な方面に最も重きをなすものであると云ふ意味に於て、更に又他方には感覺論や其他の領域から文化科學の方面とも重要な連關を持つ意味に於て重要であると思はれるが故であります。蓋し、生理學が如何に現代の思想とその生活との中に入り込みつゝあるかは、最近十年に於ける日本文化を概觀すれば自ら明かであると思ひます。卽ち私の主張は甚しい我田引水の所說ではないつもりであります。

一方研究機關を見まするに、倉敷研究所の如きは此度東京に進出されるそうですが、體育研究所、榮養研究所、衞生試驗所等に於て生理學的な部門が現在よりもつと强化擴大されて良いと思ひます。體育、榮養、衞生等は夫々獨立した分科として從來差支へなかつたかも知れないが、全體觀の盛なる現代に於ては、生理學を基礎とする體育、生理學を基礎

としたる榮養論でなければ眞の體育、眞の榮養學を樹立する事は至難かと思はれます。國民精神文化研究所の如きも、今の所生物學者を入れてゐない樣でありますが、衣食住やそれと生命現象との相關に就ての知識を持たずして、文化や民族精神を論ずる事は全く至難の事であると思ひます。斯かる意味に於て、私は生理學を其の主要なる部分とする生物科學研究所の如きものが、理化學研究所と對立して建設されてよい時期であると思ひます。

然らば斯かるオルガニザチオンの强化擴大は如何にして企圖すべきか、夫れはとりもなほさず日本生理學會と云ふ此の學的團體の强化擴大に待つ事は云ふまでもありません。

四、生理學會の强化擴大

そこで問題は生理學會自體のことになつて來たのであります。如何にすれば此生理學會の强化擴大がより促進されるか、此處でも問題は其のオルガニザチオン、人物、或はその經濟的基礎等色々あるでありませう。是又此席で一々に觸れることは出來ませんが、實際主義の立場から、差當り可能だと思はれる二三の問題を考察して見ます。先づ其組織に於

て、法人組織とする事は或は强化する所以ではないかと思ひます。公に、卽ち生理學會の名に於て當然の主張を貫徹する上に、又經濟的基礎を固める上にも必要だと思ひます。我が生理學會は創立第十五年に於て、始めて其機關雜誌を持つ事になりました。現在は經濟的事情から、揭載業績が一方に偏することは誠に遺憾な事であります。私自身としては、必ずしも他力本願ではないのでありますが、若し生理學會が、他より相當額の基金を得る樣な機會がありますならば、喜んで之を受け、法人組織とすることもよいと思ひます。金は天下の廻り持ちでありまして財產家は時と共に明滅しましても、我が生理學會は日本と共に永遠のものと思ひますから、實に本會の如きは寄附行爲をなすべき好個の對象であるとも考へられます。甚だ手前勝手の話でもありますが、然し時代は斯かる認識に到達しつゝあるかとも思ひます。然し又一方從來の歷史から云ひますと、我が生理學會は會長をも認めぬ自由主義的な處に特徵があつた事も事實であります。でありますから、此點も篤と考慮して見てよいと思ひます。

次に本會の擴大强化は會員の增加に因ること大であります。曩に私は表題の如き事を考

察すると否とに拘らず、日本生理學會は駸々乎として進むと申しました。本年の如き、新たに諸方面の學者の加入を見た事は洵に喜ばしい事だと思ひます。研究内容に關しては發言しないつもりでありましたが、本年に入り新たなる領域の諸問題が甚だ多く論究される事は、日本生理學の深さと廣さを增す意味に於て慶賀に堪へない。一方本會に一旦加入された會員は出來るだけ脫退して貰ひ度くないと思ひます。嘗て新潟の學會に於きまして、「便衣隊」なる言葉が持出されたことを記憶致して居ります。學位の獲得と共に生理學に緣を切ると云ふことは、吾々として無限の寂寞を感ぜしめらるゝものがあります。この事は經濟的其の他の事情もあることでありまして、必ずしも學的良心乃至は好學心を以て責めることは出來ぬでありませう。けれども一度生理學の研究に從事したものは假令其後の專門が異つたとしても、多少の關心を持つてもらひたい。斯くして無所屬會員の段々に增加することを希望して止まぬものであります。とは申すものゝ、私の處でも矢張り研究を了へると無關心になる人が多いのであります。私は先般念の爲生理學會名簿を繰つて私の所を出て開業して居られる人で尙生理學會に席を置く人を數へて見ましたが、僅かに八名の

無所屬會員より外留め得なかつたのであります。これは結局私の學への指導精神が不徹底で終生生理學に興味を持つ迄に導き得なかつた事を深く恥ぢて居る樣な次第であります。只此際些か愉快に思ひましたことは、生理學會を去つて三年餘り東北の田舍に開業して居た昔の共同實驗者が、も一度學の眞劍味に觸れて見たいとわざ〳〵岡山までやつて來たことであります。東洋流に、朋あり遠方より來ると云ふか、西洋流に九十九匹の羊よりも一匹の羊の譬へと云ふか、學の眞劍味に觸れると云ふだけでは、勿論未だ道の眞に到達したとも云ひ得ぬでせうが、斯やうにして一旦去つた會員が又入會してくれることは嬉しいことでありました。

無所屬會員とは無論さういつた人達とは限らず、廣く一般の人でもよいのであります。蓋し學の進步は專門家の研究に待つところ多いのでありますが、同時に又科學の水準が高まるためには知識人の水準が高まることにもよるのであります。

さて私は先程日本生理學雜誌のことを申し上げましたが、今一言を費さしてもらひます。私はこのことに連關して必ずしも他力本願ではないがと申しましたが、兎に角經濟的

事情のために日本生理學雜誌の掲載論文が一方に偏することは甚だ遺憾とする處であります。この經濟事情と云ふものは、所屬教室乃至研究所が官公立なるか、私立なるかに因つて事情が異り、從つて又認識の程度にも、可なりの相異のあることが餘外集(註四)の記事等によつて明かなやうであります。例へば私などの所は、幸か不幸か、論文發表に關する限り特別の便宜はない。卽ち學校の機關雜誌は一頁と雖も無料掲載の制度はない。故に一切は自力であります。で、無料掲載の制度のある處や、又無料でなくても安價に掲載せらる立場に於ては、出來るだけ安價にすることを考へるのは人情の自然ではあり、當然でありますが、併し假りに彼我立場を換へればどういふことになりませう。恐らくは自力で行くことを餘儀なくされることも亦當然であります。多くを申し上げませんが、認識をこの境地まで還元して改めて考へて戴きたい。若し又個人の立場ばかりでなく、日本の生理學をと云ふ觀點に立ち得る迄に心境を開拓して戴ければ、吾々は容易に日本生理學雜誌を盛り立てゝ行けると思ふのであります。若し夫れ、機關雜誌は會員が讀ましてもらつてゐるからこれは會員に於て負擔すると云ふ立場まで Aufheben さるれば正にその認識は完璧

に近いと云ひ得ませう。

私の申し上げることは以上で大體盡きて居ります。尙一言を費さして戴きます。今回の學會の機構は一方に於ては總會、又一方に於ては分科會、而して更にその分科會の概要を第二次の總會に掛けると云ふ仕組でありまして、一面には Dissimilation で Differenzierung の度を高め、他方には Assimilation-synthese の過程を忘るゝことなく、更に其處に全體 Ganzheit が具現される。洵に生理的なオルガニザチオンを持つものとして生理學會に應しく、恐らくは他に類例のないものと思はれる。殊にその分科會に於ては或は座談の形式を採つて充分にヂイスカス、卽ち翫味し、味倒することは、學會本來の目的にかなふものと思はれます。日本生理學史に於て一つの飛躍でもあると思はれます。學會の制度も年と共に變るものであります。昔は一講座一時間、專門學校二十分より四十分となり更に會員制度になつて會費を徵集する樣になると一人何分と云ふデモクラテツクな考へが入り其關係が中々複雜でありましたが、今回の試みは斯かる境地を克服してかなり理想に近いかに思はれます。學會が斯かる境地に Aufheben せられたことは、元より日本生理

學の發達の歴史を背景とするものではありますが、暉峻と云ふ一個の人間を通して斯かる飛躍をなすかと思へば、一面大に暉峻所長に敬意を表すると共に興味深く感ぜらるゝ次第でもあります。同時に私が最初申し上げたやうに、私が表題の如き問題を考ふると否とに係りなく、日本生理學が日に月に新たに駸々乎として進む所以でありまして、今迄申し上げた事が實は無用であつたやうな氣がしないでもないのであります。

とは云へ、この制度は最善であると申すのでなく、明年は又明年の進境に卽して企圖される事が最も望ましい事でありまして、本年はこの制度の下に最善を盡したいと思ひます。

生理學會が十五周年であると共に、本勞働科學研究所も十五周年を迎へられ、此學會を最後の紀念として勞研の東京への進出は奇しき因緣であると思ひます。慶賀に堪へません。私は重ねて此處に表題の如き考察を總會の席上に許された事に對し暉峻所長に厚く御禮を申し上げます。

文　獻

（註一）久野　寧　The physiology of human perspiration. 1934

（註二）加藤　元一　The microphysiology of nerve. 19·4

（註三）浦本政三郎　近世日本生理學思想史論　一九三五

（註四）生理學餘外集第二卷　第三號

〔昭和十一年十月第十五回大日本生理學會總會演說〕

一七、神經痲醉部位の興奮傳播に就ての諸學說に

——減衰不減衰傳導學說論爭の行方——

〔上〕

科學日本と云ふ言葉が屢々用ひられるやうになつて來た。民族と科學と云ふ文字も屢々見掛ける。だが、科學界において過去一年の間、何が最もセンセイションを喚び起したかと謂へば、それは素晴らしい研究業績ではなく、實に田邊博士の「科學政策の矛盾」と題する一文であつた。そも〳〵それは何を物語るか、日本に於ける科學の現狀を表徵する以外のものではあるまい。

さて日本の生理學界を見るに學會が組織されてから十六年、年々著しい進展振りである。もし之を中華民國の夫れに比較するならば、學會の歷史の上では僅か六年の相違に過ぎぬが(第十回民國生理學會は本年四月上海に開催)、彼國ではあまり進展の跡が見られぬのに、我國のそれは研究業績の報告數は素よりのこと、研究領域の擴大や其內容の進展振りがいかにも躍進日本と云ふ文字を用ひたいやうな氣持がしないでもない。だが、一歩退いて歐米先進諸國の水準と比較すればどうであるか。實に次の點において遙に及ばないと云ふ感じが持たれる。つまり指導的な位置を占める業績が出ない、輕く全般を見渡せば、研究者の數も寧ろ彼に優り、又業績の發表も多いかも知れぬ。だが理論的の方面にしても又實驗方法の方面にしても、彼等をして追從せしめ得るやうな業績は一向見當らぬ。打てば響くけれども殘念ながら響くだけで打つものがない。例へば水素イオン測定法が發表されると、響に應じて、よりデリケートな實驗を纏めあげつゝ展開せしめて行く器用さはあるけれども、まだ一つも打つものがない。これはひとり生理學とは限らぬことで、おそらくわが國の科學一般の傾向ではあるまいか。

現時量子力學・波動力學と云ふ新物理學の方面では、新しい理論と實驗とが次々に進展して行きつゝあることは、吾々專門外のものにも知られて居る。だがその領域でも響くものはあつても打つものはなく、踊るものはあつても笛吹くものが居ないやうである。日本の科學はその裝ひにおいて紳士にはなつたが、殘念乍ら成り上りものたることの事實を蔽ひ去ることは出來ない。實に歷史が短いと云ふことの淺ましさ、學の雰圍氣が、又學への認識の程度が殘念ながら彼等の水準に到達することが出來ない。

これを全く變つた側面から卽ち社會的反映から觀察して見よう。政黨華かなれば政黨人ものを云ひ、軍部華かなれば軍部ものを云ひ、今や科學華か(?)にして科學人がものを云ふべく、而して云ひ得た處は偶々「科學政策の矛盾」でしかなかつた。一斑を以て全豹を推すと云ふ。これ方しくこの國における科學の社會的位置と、又科學人の認識とを表徵する以外のものでない。

表題の問題に還る。茲にこの問題を取りあげるのは、一つはこの問題が興奮機轉と云ふ

生理現象の中でも最も生理學的な事柄に屬し且つ夫れが理論的方面にも涉ること、二つには日本の生理學の先覺者は主に刺戟生理學者であつたと云ふ歷史的關係からこの部門の研究が今でも相當に多く、且つ又昨年二月十八日この新聞の科學欄に述べたやうに、日本の生理學としては目星い研究題目の一つでもあり、三つにはこの問題に就ての論爭が第二回日本生理學會以來十數年に及び、自分も亦この問題の批判實驗者として批判の筆を採つたこと一、二回に止まらぬ關係から、その後の成行きを明かにして置く義務があるやうにも思はれるためである。

この問題の核心は神經纖維における興奮の傳播は、その正常狀態においては悉或無法則(全か無かの法則)に從ふが、痲醉にかゝりつゝある狀態において果して此法則に從ふ(不減衰傳播)か從はぬ(減衰傳播)かに關係する。此事實は換言すれば、神經細胞原形質の刺戟に對する反應の樣式に就ての性質に關係する。もつと科學的な表現を用ふれば、興奮とは生活物質の潛勢力(化學勢力)が活勢力に變移する過程であるから、その際變移する勢力量は刺戟の强弱に關りなく常に一定であるか、それとも大小の差が生ずるかにある。更に

換言すれば、神經纖維は痲醉時において正常時の如く等變系(等興奮系)に留るか、或は又不等變系(不等興奮系)になるかの問題である。而して此ことが興奮の傳播において證明されるためには、興奮の大さが痲醉部位の空間、卽ち長さの差に因つて變る(減衰)か變らぬ(不減衰)か、又時間的に傳播の速度が變るか變らぬかに就て實驗すればよいのである。

〔中〕

そこで實驗は神經の興奮によつて支配筋が收縮する事實を目標とし、神經痲醉部位の長短の差により痲醉し始めてから筋の收縮が見られなくなる迄の時間が相違するか否か(長短比較實驗)、或は又興奮の大きさと働作電壓とが平行する事實を目標とし、痲醉部位の種々なる個所より働作電流を誘導して働作電壓を比較し、更に又二個の刺戟を繼起的に與へ、二つの興奮が筋收縮に於て重り合ひ得る最小の時間間隔、いはゆる最小間程なるものが、痲醉部位の長短に因つて變る(分離)か變らぬかと云ふやうな檢討が重ねられつゝ漸次其實驗が進展して行つた。

さて實驗の成績は實驗方法によつて異りうるものであるから、上述する實驗の成績が研究者によつて異れば、其實驗法が實驗の歸結を導くのに合理的であるか否かが吟味されることは當然である。だが、この論爭の初期における、も一つの困難は多數の神經纖維の集合より成る神經幹を材料とし乍ら、而も實驗の歸結を一本の神經纖維卽ち神經細胞に付與せんとしたことにあつた。處が一九三〇年に至り慶大の清水、釜谷の兩氏は相前後して神經幹の中から單一神經纖維を、又筋體の中から一本の筋纖維を分離する試みに成功した。この試みは分離せられた標本が分離操作によつて多少生理的でない狀態に置かれると假定しても、問題を一歩前進せしめたことを否むわけには行かない。であるから昨年レニングラードに開かれた萬國生理學會でもこの實驗法が賞讃されたと新聞が傳へてゐる。

一方昨年の學會において慶大、田崎氏等は髓鞘絕緣法と云ふ新しい實驗法のもとに、神經纖維を痲醉すると痲醉藥は充づ神經纖維の髓鞘の切れ目であるランビエーの絞輪部から侵入し始め、而もこの事實は生體內の神經にも適用されることを報告した。この實驗結果は神經が髓鞘を有する限り、痲醉は常に不均一に行はれることを意味し、論爭途上にあつ

た本問題に就て啻に第二の時期を劃するのみならず、この論爭をして全くその出發點に還らしめる底の實驗であつた。神經の痲醉に當つて痲醉藥が不均一に侵しはしないかとの豫想は、筆者が他の機會で屢々述べたことで、又筆者と限らずこの問題の研究者は誰れでも一應考へたことであるが、田崎氏が端的にこの點を實證されたのは蓋しヒツトであり一歩を進めたものとして多とすべきである。田崎氏がこの事を思ひ付いた折りは興奮のあまり一週間ほど寢つかれなかつたと傳へ聞いてをるがさもあるべきである。この報告があつて以來、念のため筆者の研究室でも追試實驗を行つて見た。その成績には多少の差異を見たけれどもその歸結は全く同じであつた。

扨てこの實驗の意味の重要さは何處にあるか。元來減衰不減衰傳播學說の出發點は、神經が均一に痲醉されることを前提としてその興奮傳播樣式を論究したのである。從つて、若し神經纖維が部分的に、卽ち不均一に侵されるとすれば、均一なるべき興奮の傳播が斷絕するから、筋收縮を目標とする場合、全乎無乎的な結果として現はれるのは必然であ

る。而してこの事は、フエルヴオルンが傳播學說を樹立する爲の根本假定を根こそぎ奪ひ去つて仕舞つた譯である。

〔下〕

前述の問題はフエルヴオルンが電流滑走を顧慮しなかつたためでなく、それよりも一歩手前の段階において、卽ち神經纖維の顯微鏡的構造又痲醉の機轉への顧慮が拂はれずに、つまり神經が均一に痲醉されると假定したことに在る。かやうにして、十餘年の論爭はこの一つの實驗によつて百八十度の回轉をなした。今後新たに神經纖維が一樣に痲醉されるやうな實驗條件が發見されない限り、最はや傳導學說に就て云々することは容易でない。又この實驗より從來の論爭の跡を逆に觀察すれば、單に實驗結果に關する限り、單一神經纖維に就ては全乎無乎的結果に到達した慶大の成績は至當であり、神經幹を材料とした實驗では集合論的な確率の上から、全乎無乎的でない成績を示した減衰傳播學派の成績が至當であつたと云ふことになる。だが、今更そんなことの詮議立ては凡そ意味ないことであ

る。新たな觀點から新しい試みが次々に進んで行くところにのみ意味がある。

以上述べ去つて見ると十數年の論爭を經過し、學士院賞をめぐつて一時は社會問題化するに至つたこの問題が、一つの實驗であまりあつさり片づき過ぎた觀が無いでもないと觀る人があるかも知れない。併し夫れは早計に過ぎる。過ぎ去つて見ればナンセンスのやうに思はれる學說の立證に何十人の博士が出來たとの非難は必ずしも當らない。其處に歷史の歩みがあり又科學の特性がある。科學の進展は常に革命的であるやうでも、その革命的な進展は實に歷史を背景としてのみ起りうる。

この十年の間に新物理學の領域では陽性子、中性子などと新しい革命的な發見が陸續と現れた。だが夫等の發見は名もなき研究室から生れ出たのではなく皆學の香ひ高き雰圍氣の中から、つまり歷史を背景にして現はれたのである。表題の問題を前述の引例と同一水準に語ることは出來まいが、學の進展して行く過程は一つである。であるから斯聞記事として論爭の筋道だけを拾つて行くとあつさりしてゐるが、その間に横はる個々の實驗內容をつぶさに檢討して行くとその中には幾つかの新しい進展への素材が拾はれ得る。併しこ

ゝでは述べられない。

この一文、冒頭に當つて表題とは餘り關係のない序をくつつけた。最後に當り何かそれに對應する言葉があつてよいやうである。序では學の雰圍氣と歷史の尊さを强調した。こゝでは次のやうな言葉を殘して見やう。一國の科學の水準は基礎的理論的なものが遲れてゐては結局高まらない。して見ると自然科學の二大部門たる物理科學と生物科學中で、それに當るであらう物理學と生理學のレベルが歐米先進諸國のそれに比較して、もう少し高められなければ結局は駄目である。而してそれが高められるか否かは實に歷史と人物と研究のオルガニザチオンの如何にある。

但しこれは科學の世界のみに限られたことではない。（昭和十一年二月讀賣新聞に掲載）

一八、醫學の學位は低下したか

一、序

人間の生活に最も關係の深い醫學界の展望、これは淺學菲才なる筆者などのものすべき筋合ではない。だが當らずして遠きも可なりとの註文であり、科學も亦人間の所産に過ぎぬ故、强ひて神祕の扉を閉ぢず、より進んで生活と一層密接する方が却つて學の尊嚴を保たしむるものであらうとの信念から敢へて一文を試みる次第である。

二

醫學を全般的に見る場合には先づ其出發點に於て斯學が甚だ廣汎に亘ること、又我國に於て斯學が他の科學に比し甚だ盛んであることに最初の注意が向けられなければならない。そこで、筆者は問題の核心に觸れる前に一寸此點に就いて述べる必要を感ずる。醫學の應用方面は人間のみならず獸類より植物に及び、其治療方面には藥學なるものが不離の關係にあり、更に齒科醫なるものが特殊の分野を成して居る。これを修學制度から見ると醫大醫專の他に獸醫學校、藥學校、齒科醫學校等が獨立した修學又は研究機關となつて居る事が如實に示して居る。假りに其等を除外しても醫學の範圍は極めて廣い。

本年開かれる第九回日本醫學會の分科會は醫史學、解剖學、生理學に始まり軍陣醫學、保險醫學、醫科器械學に至る迄凡そ卅二分科である。併し乍ら分科の多いと云ふこと自身は必ずしもこの學が廣汎に亘ると云ふことの簡單にして的確な證據になるとは限らない。寧ろ醫學の各分野が他のあらゆる科學領域と如何に接觸し如何に喰ひ込んで居るかを觀察することから窺はれなければならぬと思ふ。併しこのことを詳說して居ては表題の問題に遠ざかる故この程度に止め、第二に前述の如く我國に於て斯學が甚だ盛んであることに注

意を促して置かねばならぬ。

既に帝國大學の中にも醫學部はあるが、理學部乃至工學部の未だ設けられて居ない處があることは周知の事である。加之我醫學に於ては帝大醫學部單科大學、私立醫大乃至醫專等その修學乃至研究機關の多いことは遙かに他の科學を凌駕して居る。そこで最近醫學に於ける學位が他の學の夫れに比して著しく低下したと云ふのが社會一般の通念となつて居る樣である。だが、斯る通念は全く前記の立脚點を閑却したもので、その研究者の數、研究機關の整備等より考察すれば、醫學に於ける學位獲得者の數が多いと云ふことは寧ろ當然のことてないかと思はれる。併し乍ら、人或は右の數量的比例的觀察よりも醫學研究上の業績の質の問題を以つて學位の低下を云々するかも知れない。併し此點などは假りに引例を我國文化科學方面との對立に求めて見れば思ひ半に過ぐるものがあらう。一體我國一流の哲學者、經濟學者、法學者等の業績が何處にオリジナルがあり、どの程度に世界的に認められて居るかを考へて欲しい。尤も此種の比較には一寸非難もないではない。が、寧ろ低下したといふ醫學の業績の方が遙かに世界的であると考へる事を誰が積極的に否定し

得るか。

斯樣に考へると我國に於ける現代學術の全般に亘る社會的水準では醫學は決して他の諸科學に劣るものとは考へられない。從來我國の自然科學に於ては化學方面よりも物理的方面がより世界的であると見做されて居る。が、醫學は決してそれ以下にあるものとは考へられない。次に醫學知識なるものは——之は學術と云ふ意味ではない——如何に一般社會人の知識生活と直接してをるか、これ又重要なことである。最近物理學の長足の進歩に伴なつて物理學的世界觀と云ふものは可なり多く、一般社會人の知識生活に入り込んで來た。他方社會科學上の知識も亦マルキシズム勃興以來過分に人々の知識生活に入り來つた事は敢て筆者が說く迄もない。其の他文化科學方面卽ち哲學一般例へば西田氏の西田哲學、田邊氏の數理哲學、左右田氏の經濟哲學と云ふやうなものも、かなりインテリの知識生活と密接するものとなつた。こゝに注意すべきは醫學的知識も亦可なり其點に於て進出しつゝあることである。醫學の基礎知識は後に述べる如く基礎醫學にあり、基礎醫學に於ては形態的知識體系としての解剖學、機能的知識體系としての生理學がその根幹をなすものであ

るが、最近岩波書店が創業廿年の記念出版に先づ解剖學及び生理學を取り入れた事は以上の意味に於て頗る注目すべきである。これは婦人雜誌等に見る大衆醫學の記事とは基礎的なることに於て全然別個の意味がある。つまり醫學的世界觀、一層判り易く云へば生機的世界觀なるもの〻一般社會人の知識生活に入り込む道程であるからである。唯物辨證論を基礎とするマルキシズムも或理路から極めて興味がある。併しそれの實際運動は民族の動きと云ふ如きより大なる生物學的事實を閑却したが爲めに間隙が出來た。筆者は常に主張して居る。我が國一般社會人の知識生活には、もつと生機學的世界觀を入れねば駄目だと。燦爛たる文化の發達や科學の殿堂に目がくらんで、之を產出した人間其物を忘却しては本末顚倒である。斯る意味に於て筆者はアメリカの生理學者キヤノンのバイオクラシーの提唱や、東大橋田教授の因果性と全機性(科學二、一九三二、一一—一二)なる論說等は頗る興味深きものあるを覺えた。

三

醫學の廣汎であることは前述の通りであるが、外國はいざ知らず、我國に於てはその修學制度上基礎醫學及び臨床醫學なるの二大分野に分れて居る。依つて先づ基礎醫學の領域から概觀しよう。基礎醫學の根幹は既述の如く解剖學と生理學である。前者は形態的、後者は機能的知識の體系である。而して解剖學は其の記載が肉眼的であるか、顯微鏡的であるかによつて所謂解剖學と組織學的とに分れ、更に生物發達の階段を時間的に追求すると所謂胎生學なる分野になる。次に生理學は生命機轉を物理的に見るか化學的に見るかによつて、所謂生理學と生化學とに分れる。

さて以上解剖及生理學が醫學知識の根幹になつてそれに側方より病理學、藥理學、衞生學、細菌學が入り込み所謂基礎醫學の體系が出來るのであるが、この體系化に就ては詳述せず直に夫等の分野を瞥見しよう。最近に於ける我國解剖上の最も顯著なる業績は足立博士の「日本人動脈の研究」である。此研究は河上博士の唯物辨證法論に引例されたことに依つて一層大衆化された。併し此名著が公にされたのは一九二八年で昨年はその姉妹篇である「日本人靜脈の研究」が將に公にされるべく期待されたが、遂に出なかつたのは大い

に殘念であつた。次に現在解剖學の中心問題が何處にあるか先づ見當がつかない。肉眼的觀察方面では骨骼の計測が可なり盛である。古代人に就てのこの計測は一方に於て人類學的知識の基礎になることは云ふ迄もない。又最近大腦回轉間の溝の變化等が從來になく關心を以て研究されてゐる樣である。かつて布施博士の腦に就ての組織學的研究は世界的とされて居たが最近は次第に微に入り細に亘り、例へば脊髓に於ける神經細胞の配列やその方向などが夫々の高さに於て如何なる點に異なるかより進んで細胞の原形質や核等の微細なる構造が種々なる染色法其他によつて研究されてゐる。

此方面はひとり解剖學者と限らず病理學者によつても亦試みられ、更に又一般生物學者によつても試みられつゝある共同研究の分野である。而してそれの歸結が當然生機學の方面とも深き關係を有することは大に注目せねばなるまい。次に近頃人體皮膚の色調なるものを系統的に檢べて居る(森)。此研究も今後の展開如何によつては面白いであらう。又淋巴管が系統的に追究されて居る(木原)。其他解剖學者にして物理學化學若しくは物理化學方面を研究方法に採用して居るものもある(舟岡、向坂、勝)。其等の研究結果が傳統的の

所謂解剖學と如何にして結びつけられるかゞ頗る興味あることである。尙解剖學は近年其術語を强制的に用ひしめる樣になつたのは注目すべく、又解剖附圖なるものは從來全く外國書に仰いでゐたが、近頃辛く日本で出來る樣になつたのは注目すべきである。

次に生理學の分野を瞥見しよう。從來醫家の生理學なるものは解剖學の如く人體に限らず廣く一般生理學乃至比較生理學の研究體系を採つて居つた。これは次に述べる生化學に於ても亦同樣である。從つてその範圍は極めて廣く醫學、理學、農學等生物學一般の共同研究領域を開拓して居た形である。茲には表題の關係から所謂醫家生理學者の研究に就て述べるに止めよう。生理學も亦他の科學の分野と同じく、其研究上のメーン・カーレントと稱すべきものは發見されない。併し一般に我國の醫家生理學には刺戟生理學の領域に於ける研究が甚だ盛んである。彼の神經痲醉部位に於ける興奮傳搬機轉の減衰的なるか不減衰的なるかに關して加藤、石川兩教授間に激しい論爭が開始せられ、其後此論爭の火中に飛込んだ刺戟生理學者も二三に止まらないことは恐らく多くの人々の記憶に殘つて居ることゝ思ふ。この論爭は筆者をして云はしむれば生理學なるものが一般大衆の知識生活に入

つてくることに於て、換言すれば生機的世界觀を社會人の知識生活に導入する手引となる點に於て日本の思想史上極めて重大であると思ふ。

さてこの論爭は開始以來茲に十一年、本年も亦同じ問題に對する論爭が多少其姿を變へたとは云へ、可なり激しく行はれた。論爭だけが十年一日の如く不減衰的に行はれるところは全く他に其比を見ざる所であらう。此の論爭の中心問題は細胞原形質に於ける興奮過程の勢力變移が果して悉或無的に行はれるか然らざるかに出發し、悉或無的とは如何なることであるかとの定義上の再吟味に到達せんとしてゐる。

生化學方面は相變らずヴイタミンの問題が盛んである。ヴイタミンBに關してはそれが單一の物質でなくB_1、B_2、B_3、B_4と數種の混合であるとの說が漸次有力になつて來、而してB_1が所謂脚氣に關係するもので、B_3は寧ろ成長に關係あると云ふやうなことが判つてきたやうである。ヴイタミンCについての研究も亦相當盛んである。

四

臨床醫學の領域に於ては美しい學の體系が出來上ることよりも、實際病が治してもらへるか否かと云ふことが吾々の生活にとつて一層直接且重要である。茲に醫學と醫術の問題が起るのである。この臨床醫學は概括して內科系統外科系統及傳染病寄生虫系統の三つに分けることが出來よう。內科系統でば、曩に漢藥の條下で述べた如く、時代の反映として西洋醫學に對する東洋醫學所謂漢方醫學が多少擡頭して來たやうである。但し系統的なものではないが多少の注意を拂つてもよからう。西洋は分析的、東洋は綜合的であるから、東洋醫學は病を部分の失調に求めずして全體の失調に求める點が異つてゐる。外科方面は滿洲事變以來軍陣醫學としての發達が當然期待される處である。傳染病方面では先年來の流行性腦炎について可なり學會並に日刊紙を賑はした。

但しまだその豫防法乃至治療法が完成されたわけではない。結核及脚氣は我國に於て重要な病の二つであるが、此方面には目下擡頭しつゝある體質學を加味して考察する要が頗る多いと思ふ。ヴイタミンの研究以來脚氣で命を失ふものが年々減少しつゝあるは慶賀すべきである。結核に對する考へも近來漸く變遷し、寧ろ早く感染して免疫性に得ることが

この病に冒されざる捷徑の一つと見なされるに至つた。可愛い子は早く結核に感染させよと云ふことにならぬとも限らぬ。

五

衞生學、優生學、榮養學、微生物學、寄生虫學、法醫學、保險醫學、醫科器械學、醫史學、スポーツ醫學等の領域では後の二つが本年に入り比較的進出したと認むべきであらう。衞生學、優生學、榮養學、微生物學は社會醫學の體系に於て、或は又近來提唱されつゝある豫防醫學なるものに於て意味があるであらう。梁の武帝が西來の達磨大師に如何なるかこれ聖諦第一義と問ふた處、達磨は武帝の顏をつく〴〵と眺めて「廓然として無聖」といつた。武帝はどうも解せなかつたが、知識の向上した近代人は達磨ならずとも「如何なるかこれ醫學の極致」と問はれるならば立ち處に「廓然として無病」位は答へられる。病人をつかまへて之を治さうなど泥棒をつかまへて繩をなふものである。

須らく病の未だ發せざるに之を止めるのでなければならぬ。「國破れて英雄現はれ」は

言葉の綾に面白味はあるが、なるべくならば國破れないで英雄現はれぬ方がよい。誰かの燒土外交、其の言や悲壯であるが、なるべくならば燒土は御免である。豫防醫學は確かに其お題目に於てよろしい。只年と共に缺食兒童が增加するやうな社會情勢では、學成つても其成果を社會大衆に及ぼし得ない憾みがあるであらう。併し社會の向上は飛躍的であるよりは漸進的であるのが定石である。茲に於てか醫學の成果は現金取引的に——萬病藥の廣告のやうに——社會人の知識生活に入るにあらずして、その正しい基礎概念が先づ社會人の知識生活に入るにあらざれば到底其の成果を擧ぐる見込みが付かない。醫學者も醫者も一般大衆も此點を忘れてはならない。（昭和十年、讀賣新聞掲載）

四、日本民族生物力の一斷面

一九、日本と水泳
二〇、日本の水泳はまだまだ伸びる
二一、兒童雜感
二二、兒童體育に就ての一二の考察
二三、斷種法に就ての一考察

一九、日本と水泳

國際スポーツ界に躍進日本の姿を最も露はに表徵する處のものは何でありませうか。夫れは云ふまでもなく水泳日本であります。馬術、或は陸上競技に於ける跳躍等も優れては居りますが、之を全般として廣く世界一般に認められて居るのは、所謂「無敵水上軍」と稱される日本の水泳陣であります。吾々は此「無敵水上軍」をいつまでも確保したいものと念願して居ります。それに就て、吾々は絶えず息む事なき關心を持たなければならぬのであります。

先づ第一に吾々の考へねばならぬ事は、矢張り歴史でありましやう。「海の日本」として、昔から日本人は泳ぐ事に馴らされて居たのであります。だが、今日の泳法は、觀海流

に發する平泳、即ちブレストを除く以外には、大正四、五年以來渡來した處の泳法であります。自分は大正二年、滿鐵が初めて大連に水泳場を設けた時、水泳教師に雇はれて出掛けたことがありましたが、當時の泳法は、今日の云ふ古典泳法でありまして、私の記憶する限りでは、クロール泳法は大正四、五年頃からぼつ〳〵初つて來たのであります。尤も此泳法のオリジナルと見られるバタ足は、小拔手の如き古典泳法の中にもあつたのでありますが、手の運動や呼吸法等々、之を全體として觀れば、一つの新しい外來の泳法と云つて良いのであります。

扨て、吾々はそれから僅か廿年の間に、日本が「無敵水上軍」と認めらるゝものを作りあげるに至つた理由を、吾々は充分考へて觀なければならぬと思ひます。日本人の體骼を以てして、國際スポーツ界に君臨すると云ふことは、嘗て吾々は可成り疑問視して居た處でありました。然るに吾々の豫想は見事に裏切られ、あらゆるスポーツに於て今日の如き日本の躍進を觀るに至つた事には、その理由が種々あるでありませうが、先づ極く普通な考へから致しますと、結局研究努力の結果が報ひられたと云ふ事もその一つであります。

陸上の吉岡があの體骼を以てして、一〇〇米に一〇秒三と云ふ世界タイ記錄を出すためには、實に十年の長きに亘つて、克己怠ること無き理づめの研究態度を持續した處になくてはならない。夫れと同じ理由が水泳日本にもあると思はれるのであります。

然し乍ら、凡そものは總べて傳統的な力の前驅が必要なものであります。或時、或人が云ひました。日本がクルップ鐵工場にも劣らぬ大砲を短い期間の經驗で鑄造し得るやうになつたのは、矢張り古來の日本の刀劍が——それは小さい武器ではあるが——世界的に最も優れたものであつたので、その刀劍鍛錬の道行を大砲鑄造の場合にも當て嵌めたと視る事が出來るのであります。さうすると、日本水泳の躍進も、一見すると、クロール泳法が初つて以來頓に發達したやうに見えるけれども、實は水の日本の傳統的な鍛錬の歴史が、重要な役割を成して居る事を省みなければ、此事に就ての充分なる理解が出來ぬのではありますまいか。

次に凡そ競技と云ふものは單なる身體的鍛錬だけではない。physical and mental の optimal condition を、即ち物的心的の最適條件を飽く迄檢討して行く處に發達があるの

であります。疊と下駄の文化は、解剖學的又生理學的に脚部、殊にその膝關節、足關節等の關節運動の自由度を高めて居る樣な關係から、跳躍競技に有利であると同時に、クロール泳法にも亦有利である如く思はれる。然し矢張り其異常なる發達は、研究態度が本來合理的であつたためと思はれます。それは例へば、世界經濟、殊に世界貿易の不況時代に於て獨り日本品の著しい進出を見るのは、その基礎條件の何處かに合理的なものがあるであらう事は、何人も否定せぬ處でありませう。でありますから、筆者の如きは、最早、自ら泳ぐ事は出來ませんが、せめて日本の水泳に何等かの寄與をなしたいものと、先年來、日本一流水泳選手の極大酸素負債量などを調査して見ました。今までの研究では、最大酸素負債量八立と云ふ成績を得たのであります。之は一昨年秋、清川選手がバック五〇米で三〇・八秒と云ふ世界記錄を作つた時の極大酸素負債量でありますが、現在では更に優秀な多くの選手に於て酸素負債能力が更に增して居るかも知れません。然し乍ら、以上の結果から筆者の見る處では、日本水泳選手の酸素負債能力、從つて競泳者としての能力はまだ〳〵伸び得る。少くとも極大酸素負債量に於て十立を越す事が出來るのではあるまいか。即ち

もつとスピードアップ出來るものとして、云はゞ、他山の石ではあるが、泳法それ自體の研究は、勿論今後益々進められねばならないと思ひます。

もう一つ見逃してならぬ事は、「水泳日本」の躍進も亦矢張り、「躍進日本」の姿の一つの反映として見なければならぬ事であります。つまりは民族意識の高揚に結果する處のものであつて、それは見方に依れば、一つの自然現象、自然過程としての民族の若さ、爭鬪意識、民族的氣魄のあらはれ——表徵であると云ふのであります。如何に技を極めても、この氣魄がなければ絕大なる迫力を持つ事が出來ないと思ひます。

以上はいつも自分が水泳日本に就て考へて居る處であります。此機會に於て部員各位の御一考を煩はしたいと述べる次第であります。尙、學生スポーツなるもの〻意義は、飽く迄技は第二義であつて、結局人間的の修養が第一義である事は云ふまでもないのであります。此點に就ても、部員諸君が常々充分考慮される事を切に希望する次第であります。

（慈大水泳部雜誌創刊號掲載第十一回オリンピック大會日本水上軍出發の翌日、昭和十年六月）

三〇、日本の水泳はまだ〳〵伸びる

一

水泳に就ては筆者は最早現役でない。現役どころか豫備後備も過ぎて仕舞つたのであるが、日本の水泳と云ふことに就ては少からぬ關心を持つて居る。で、筆者は運動の基礎的研究に就ては、日本學術振興會から研究補助を受け、色々の運動競技について日本選手の能力及び能力限界等の問題を研究しておるが、その水泳選手に就いて實驗した結果から推定すると、日本の水泳はまだ〳〵伸びる。つまりもつとスピードアップされ得ると云ふ考を持つて居る。以下少しくそれに就ての考を述べて見やう。

二

過激な運動は身體にとつては云はば一つの非常時である。貯へられた潛勢力を急激に水泳と云ふ機械的運動に必要な機械的勢力にかへてゆかなくてはならない。その勢力は運動生理學で知られておるやうに、直接の力源は糖原質なる炭水化物が生理的燃燒をなすことに依つて放出する勢力であり、蛋白賴と脂質とは二次的力源として直接には關係しない。

扨てこの生理的燃燒とはローソクの火が燃えるやうに、又汽車汽船で石炭や油が燃える事に依つてそれらの汽車や汽船が動くのと原理に於ては少しも變らない。只生物の場合では、酵素と云ふ化學反應を促進する物質がある爲め、高溫に達する事無く、體溫の範圍内で燃燒するだけの相違である。此燃燒、所謂生理的燃燒は、生理學で內呼吸と稱するもので、物質が燃燒する爲めに酸素をとり、燃燒產物としての炭酸を排出するのである。吾々が鼻腔、氣道、肺胞に依つて營む呼吸は所謂外呼吸と呼ばれ、外呼吸で取入れる酸素は、內呼吸が激しくなればなる程增大してくるのであるから運動時には息がはづむのである。

又心臟の働が激しくなるのは、外呼吸で取り入れた酸素を燃燒個所に運搬するためである。

三

扨て、運動時は身體非常時であるから、その際に必要な酸素を外呼吸に依つて補充しやうと思つても間に合はぬ。そこで已むを得ず必要な酸素量を體内で融通する。その融通しただけの酸素は、運動し終つてから、餘分に酸素を取つて返濟するのである。此借入酸素は如何なる場所から如何にして借入して來るかはまだ充分に判つてはゐないけれども、この方面の權威者エー・ヴイ・ヒルは之を酸素負債と名づけてゐる。この酸素負債能力が大きければ大きい程選手の能力が優秀であると云ふことは一般に見とめられた處である。そこで筆者並びに共同實驗者は、色々の運動選手について酸素負債能力を測定してみたのであるが、陸上競技で短距離の權威者吉岡選手について驗査した結果は十五立以上になつた。此價は從來日本選手について行はれたうちの最大の酸素負責量であつて、先づこの邊

が極限でなからうかと思ふ。外國の一流選手でもそれ以上の報告は稀である。拳闘選手については、ピストン堀口で名高い堀口選手の酸素負債を測つてみた。拳闘では本試合では測れないため、練習試合で測つたところの最大酸素負債量で七・八立であつた。次に水泳選手で最も好機會をとらへたのは昭和九年の明治神宮競技で五十米背泳で清川選手が三〇・八秒と云ふ世界記錄をつくつた時に測定した結果は八立前後であつた。その他の水泳選手についても八立を越す場合はなかつたのである。水上競技に於ては身體條件がランニング等と異るため、この位が最高かも知れないと云ふ想像が許されないではないが、種々の條件から考へてみて、も少し酸素負債量が增すことが出來るやうに考へられる。これが十立を越えて十一、二立まで達することが出來れば、も少しレコードが短縮されると思ふ。是が筆者が日本の水泳がまだ〳〵伸ると考へる科學的理由である。

四

序ながら、この酸素負責と云ふもの〻機構を考へると、實に興味がある。之はつまり酸

素の負債能力は酸素の借金能力である。この借金能力が大なれば大なる程選手としての個人能力も大である譯である。この理窟は個人の運動能力のみに限らない。個人の借金能力、又、都市や國家の公債能力が同時に其健實さを表はすのである。興味は尙これだけではない。運動後に於ては、陰性相と云つて血壓でも呼吸でも脈搏でもあらゆる身體機構が一時正常より低下する時期を經て初めて正常に戻るのである。戰爭等は國家非常時であるが、その正常への復歸狀態を考へると矢張りかうした陰性相を一應經過する。これ又筆者の主張する國家有機體說の一の證明になるのである。が、この事は他の機會に述べたからこゝには述べない。（昭和十年、讀賣新聞掲載）

三、兒童雜感

一

初めにお斷りをして置かなければならぬ。私の專門は生理學であります。今日の生理學はまだ發達の途中にあるものですから、兒童生理學とか老人生理學とか云ふやうに分化して居ない。人體生理學と云へば大方成長した大人を基準にして居る。又私は大學の學生や大學の卒業生で、尙研究を續けて居る人達とは毎日接して居るが、子供については嘗て自分が子供であつた日の體驗と、其折に友達であつた子供等への觀察と、自分の子供より外あまり知らない。つまり子供に就ては專門家でない。然し又全くの素人でもない。其處で

私の述べる事は決して專門的な權威あるものでないから、ほんの他山の石として讀んで頂きたい。只これだけのことを豫めお斷りして置くだけの良心は持ち合せて居ります。然しどうかと云へば、本來はあまり書きたくないのがその本音である。書きたくないと云ふのは間違つたことを臆面もなく書かぬとも限らぬからである。然し阿漕が浦の何とか云つて本誌主幹岡田博士からの御依頼も度重なると遂に知らぬ智慧をも絞るやうになる。所謂窮すれば通ずとはこの事である。豫め讀者の了解を得て置く次第です。

二

私共は小さい折に「いろはたとへ」と云ふものを敎はつた。例へば「犬もあるけば棒に當る」といつたやうなものである。何のことかさつぱり判らなかつたが、中年にしてやうやく其の意味が判りかけた。で、先づさうしたいろはたとへの一つから述べて見たい。「可愛い子には旅させろ」と云ふのである。これは旅と云ふ言葉を以て色々の體驗と云ふことを言ひ現はしたのである。人はその家柄や貧富によつて略定まつた生活をするもので

ある。川柳に「役人の子はにぎ〳〵をぢき覺え」と云ふのがある。感服した句ではないが一面の眞理を道破して居る節もある。旅はさうした定つた生活の羈絆を暫時でも脫せしめる方便になる。こゝに偏食の子供があつて兩親は大層心配をして居られるとする。心配しても偏食の習性は身心相關的なものであるから治る氣づかいはない。只窮すれば通ずる。學校の旅行では一人の生徒の爲に特別の料理も出來ぬから食べなければ放つておく。食はずには居られないから、やがて食べるやうになる。まあさう簡單にはかたづかぬであらうが、原理に變りはなからうと考へられる。又いろはたとへに「井戸の中のかわづ」と云ふのがある。所謂壺中の天地に居ると他所の事が判らない。判らないですめば大層よいのだけれども、人間は社會的生活をするものであるから、それが判らなければ結局判らぬものの不幸になる。人の世がいやだからと云つて、人でなしの世に住むと云ふわけには行かない。仙人ですらもが矢張り人の世に住んで居るのであり、神樣も亦人の世に住んで居るのである。そこで定つた生活をして居るものに他の生活を見せて批判と同情とを自然に體識せしめる事が必要である。私共が小さい時は隨分とお友達の家に遊びに行つてご飯などを

よばれ、悠々と人の宅を我が宅のやうに暮らした覺えが多い。今はこれが隨分少ない。都會では殊に少ないらしい。此の話は私共同僚が寄るとさはるとよく話題にのぼる。宅の子供は一向お友達の宅に遊びに行かぬし、又お友達も一向來ない。不思議だナーと云ふわけである。これが日本の文化が進んで、一般の生活樣式が變つて來たのと、又子供が習學上の負擔が多くなつて來た爲かとも考へられる。然しこれは考ふべき一つの材料で、識者の注意を喚起したいと思つて居る。今日の如き子供の生活はあまり餘裕が無さ過ぎるやうに思ふ。又汽車の一二等客の樣にあまり甲乙の間の親しみがなさ過ぎる樣に思ふ。尤も之は私が都會の子供を多く見て居るからかも知れぬ。然し又この雜誌を讀まれる方々は大方都會の人々であらうから、この事はよく當嵌るとも考へられる。吾々明治年代に育つたものは、丁度其の期が階級打破で士農工商平等になつた時代であり、勿論今でもさうである筈ではあるが、明治維新以來七十年で社會の秩序が立つて來ると、又自然に別側の階級が形成され、交際範圍が自ら定つて來る傾向がある。日本のよさは、又明治以來の日本の進展は、階級打破の精神に於て、各自が自由競爭の立場に置かれた處にもあつたやうに思はれ

る。話が横道にそれたやうであるが、云はんとする處は、子供が總べて平等の立場に育てられ、階級意識を持たぬやうに育てたい。つまりのんびりとおぢ氣がつかぬやうに育てたい。さてこれはあまりに理想的で駄目か知らん。然し理想のない世界は固定の世界で死の世界である。

三

さて又「氏より育ち」と云ふ譬へと「氏より育つ」と云ふ譬へがある。「ち」と「つ」で意味が全く別になる。氏より育ちと云へば遺傳よりも環境が大事だと云ふこと、又氏より育つと云へば決定論であつて、氏がよければ環境が、教養がよくても駄目と云ふことになる。然しいづれも嘘ではない。夫々眞理がある。實を云へば氏とは環境の累積でもあるのである。濠洲とかシベリヤとか云ふ處は昔皆罪人の流された處だ。濠洲などは政治犯だけでなく色々の罪人が送られたのであるが、今日では罪人など出ない。つまり環境がよくなると人は皆よくなる何よりの證據である。濠洲は人口の割に——密度日本の一四六分の一

——産物が多いので人民は皆有福である。若し祖先を祭ることになると、よくぞ我が祖先は盗賊になつて呉れた。お蔭で私共子孫は有福に暮らさしてもらつて居るとでも云はなければならぬことになりさうである。然し又此の反對の場合も頗る多い。南洲先生の詩にも貧居傑士を生じ、勳業多難にあらはると云ふのがある。オヤヂが財産を無くしたお蔭で、荆の道ではあつたが、こゝまで漕ぎつけたなどと感謝をして居る人もよくある。斯やうに考へると人間萬事塞翁が馬と云ふ諺の如く、何が何やらさつぱり判らぬやうであるが、大體から見ると家族制度の日本では、家族の興亡は相の長短はあるが正絃曲線、つまり波形に進んで行くやうに思はれる。即ち大きい目で見ると平等である。然し短い目で見ると遺傳が七分、環境が三分と云ふ割合でないかと思ふ。素質がよいのに悪く育てれば親の罪であり、素質が大してよくないのに立派に育てれば親の誇りと云はねばならぬ。

四

姓名判斷と云ふものは姓が氏を現はし、名が環境—つまり親の教養—を現はす點でそれ

相應の意味がある。よく字劃が悪いと云つて名前を換へる人があるが、名が悪いと考へることの事態夫れ自身が悪いのであつて、字劃が改まれば夫れでよくなる氣づかひなどあらう筈はない。只名を換へたと云ふ刺激がその人の將來の氣持を變へ、場合により氣を入れ換へる結果、よくなる場合があり得るだけだ。

長くなるので豫て私の主張する人間的能率主義なるものを述べて置く。能率主義には機械的能率主義と人間的能率主義とがある。機械的な能率主義とは消極的なもので、つまり機械は出來上つた時が一番よく、あとは次第に悪くなるから、出來るだけ悪くしないやうに惜しみ惜しみ使ふ。常に二點間の最短距離を目指す。その結果「要領よく」と云ふ安つぽい能率主義だ。人間的能率主義とは、人は之を使へば使ふ程よくなる。生物學的にも使はぬ筋は衰へ——Inaktivitätsatrophie——働く筋は太る——Aktivitätshypertropie——と云ふ事實がある。積極的である。凧が風に向つてあがるが如く、拮抗し克服して進んで行く。然し乍ら、人間自身が破壞しては何もかもお仕舞であるから、破壞せぬ範圍に於て鍛錬せしめる。幸ひ生物には順應性と云ふのがある。順應性の許す範圍に鍛錬するのが人間的

能率主義である。二點間の最長距離を行き得るものは同時に又容易に最短距離を行くことが出來る。けれどもその逆は容易でない。

人間の面白味は大體この邊にある。「白金も黄金も玉も何かせん、まされる寶子にしかめやも」と愛するは人情の常であり、凡そ子を愛しないものは居ない。只愛の手は正しい認識に於て子供に延ばされねばならぬ。（昭和十二年一月、子供衞生第三卷第一號掲載）

三、兒童體育に就て一二の考察

一

最近國民體位の問題が非常にやかましくなつてまゐりました事は皆さんよく御存じの事と思ひます。その結果は近く特別議會が開かれ、社會保健省の案が通りますれば、新しい一省が出來て、國民の體位に直接間接關係ある色々な事が國家的に取扱はれるやうになりましよう。例へば國民體力管理法と云ふやうなものが制定され、戸籍と共に國民各人の體力檢査の結果が登錄され、又體育課では如何にして國民の特に將來の國家を雙肩に擔ふ青少年の體育を指導すればよいかに就て力をそゝぐ事になると思ひます。

では、どうしてそういつた氣運が生れたかと申しますと、一つは國家的見地から、茲數年來壯丁の體位が低下した、これでは將來の日本が思ひやられる。何とか今の中に矯正して之を喰止めなければならぬと云ふのが先づ第一理由であり、次には國内に於ける一般文化の程度が高まつて、こうした事に對し人々の理解が出來て來た爲めであります。それは一つは科學の智識が進んで來た結果とも云へませう。今迄は病と云ふものを避くべからざる災難とあきらめて居たが、段々豫防醫學的な知識が進んで、理由なくして突然に來る病と云ふものは一つもない。防げば防げるものである。科學は自然を征服する。既に病に罹つてから治療をしようと云ふのは無智であり愚劣であり、己れに出でたるものが己れに歸る迄で、凡そ泥繩である。攻勢は七分の德と諺にもありますが、疾病を單に防禦するのでなく、今度は攻めて行く、積極的に無くすることを試みる。例へば結核などいふものは、先進文明國ではそうした積極的衞生施設によつてかなり克服して居る。アメリカの大學生は千人に二三名の罹病者と云ふ處まで行つて居る。從來日本では、生活の問題其他で、結核の教員なども許されて居たが段々そういふ事がやかましくなつて來るでせう。人の物を

取ることが犯罪であると云ふことは行渡つた常識であるが、直接間接人の命を危くすることは、例へ人に傳染せしむる意志は毛頭ないとしても、より以上の犯罪を構成すべきことは言ふまでもありません。唯從來は知識の水準が其處迄達せずに、病は災難の一つとあきらめる無智がそれを許したまでゞあります。以上は一つの引例に過ぎぬのですが、ともかくも斯やうに文化が進展して來たことが第二の理由であります。次は國家全般として國民の健康を省るまでに餘裕、餘力が出來て來たことであります。如何に知識の水準が高くなつても、個々人の自覺だけでは如何とも仕難い。國家の力に於て、政治的な力に於て行はれなければ解決されない。過去に於て豫防醫學の要を叫んだ醫人は必ずしも少くないが、何分是迄日本をリードした人達は、偶々自分が健康であつた爲めに其地位に到達した事に就ての反省が足らず唯々自分の技能にのみによると考へ、健康の問題には無關心であつたやうである。處が時代が、思想が、文化が段々と進展して、これが國家の力に於て行はれるやうな氣運になつたことは洵に聖代と云はねばならぬ。これが第三の理由である。

以上三つの理由によつて新しき時代が生れんとしてゐる。新しき時代とは何んである

か。若し明治維新を以て人が生れ出づる眞の人間的權利が與へられたとすれば――何故かと云ふとそれ迄は鎖國時代で、人口の增加が自國の滅亡を引起す結果、人は間引かれ過ぎたのである――昭和維新は人が父祖傳承の壽命を全うする機會が與へられる時代といつてよい。

二

斯る時代に於ては、將來の國家を擔ふ兒童の體育問題は蓋し重要事中の重要事であることは云ふ迄もありません。如何なる時代に於ても人的資源が第一であります。人の世界は人が作るものであつて、嘗て唯物史觀的に考へられたやうな生產の關係が人の意志とは別個に人の世界を導いて行くと云ふやうな考へが誤つてゐる事は、丁度疾病を災難と考へたと同じに、人間世界の無智を表白する以外のものではないのです。人間の知識は、やがてそれを克服する時期が來る。丁度今はそうした事柄が幾分でも現實の生活の上に現はれて來つゝあると思ふのであります。

扨て筆者は兒童體育の實際に手づさはつて居らぬのでありますから、それに就ての適切な知見乃至意見を持合はせて居りません。殘念乍ら茲に直接そうした事を述べることは出來ません。で、筆者は專門とする生理學の見地から一二の事柄を述べて何等か諸君の參考に供して頂ければ幸甚と思ひます。以下條件書きに二三述べて行きます。

一、體格と健康とは別個のものである。體格がよいと云ふことと健康であることとは必ずしも一致しない。之を譬へて見ると、體格の體は國體の體と同じく、歷史的なもの、傳統的なもの、父祖傳承する處の資質の一表現であります。個々人に依つて夫々別個である。遺傳的にある度まで決定せられて居る。從つて體格の改善は長時間を要する。一朝一夕に行かない。然るに健康とは心身のバランスによるもので、そのバランスが惡ければ一朝にして健康を害する。之を譬へて見れば健康は政治のやうなものである。國體が如何に立派でも、政治が惡かつた日には國家の健康は保てない。それと同じに、體格が如何に立派でも、心身のバランスをそこなつては身體の健康は保てない。

かやうに體格は運命的で、夫々多少の缺點のないものはないが、それを一々氣に病んで

は讀んで字の如く病氣になるより外ない。然しその體格の改善が出來ぬかと云ふと決してそうではない。徐々に出來るのです。而かもその出來るには自ら時期があつて、その時期は實に發達期の少年時代を措いてはないのである。こゝに兒童體育の重大意味があるのである。

大正元年以來日本人の身長は年に一分づゝ伸びつゝあると云はれる。ナチス獨逸は、民族血液の淨化と共に國民體位に最も意をそゝいで居るのであるが、その僅かな注意によつて、この數年來國民の平均身長が年に一センチづゝ伸びると傳へられる。これなどは徐々なる體格改善の一例證であるが、こゝに兒童體育は國家的な重要意味があるのである。

二、體育はまた知育である。之は釋迦に說法の所說であらうが、今日は精神が抽象的に强張される時代であるから、特にこの一項を加へて置かねばなるまい。人間に於ては身體を離れた精神などいふ抽象的なものが有り得ないと共に、又精神を離れた身體もあり得ない。之を民族精神に譬ふれば、民族精神とは民族全體の生命力を基調として動かんとする具體的な動行であり力である。であるから義務教育の延長の問題の如きはその名稱は教育

であり、從つて知育であるが如くであるが、內容に於ては體力が五〇%加入して居る。義務教育の延長に依つて實に國民の體位を向上せしめるのである。今日義務教育を終了したるものの多くが徒弟生活に入らねばならぬことは、云はゞ資本主義經濟機構の一つの大なる過誤である。折角發達期にある彼等兒童をして父祖傳承の資質を完全に發育せしむる機會を與へないことになる。若しそれが事實とすれば國民は完全に身心の發育の機會を與へられずして義務のみ負はされることになり、一方又國家としても莫大な損失にならなければならぬ。從つて斯る無知の時代は速に克服せられねばならぬ。

三、日本人の素質は複雜である。日本人種の血液は單一でない。人種學的に考察しても又文化史的に考察しても、之は殆んど明かである。だが、それはその中にあらゆる素質を包含するところに實はよさがあることを裏書きする。故にかゝる考のもとにその最もよきものを時代に適應し、科學の進展につれて引出して行くことが必要である。又その可能性をそれ自身に持つのである。この事は血液の單純を望むよりは却つて奧深い趣があり、一切の文明を包含して新しき文化を創造する素質を持つことであり、同時にそれは身體の問

題にも妥當する。

四、人間的能率主義と機械的能率主義の相違、教育ことに體育にたづさはるものはこの二つの事柄をはつきりと認識して置くことが必要である。從來能率を擧げると云ふ言葉は度々用ゐられて居るが、その意味がはつきりして居なかつた。機械的能率主義とは消極的であつて、ある一つの機械を最も能率よく用ひるには油などさして惜しみ惜しみ用ふることによつて目的を達するが、若し人間をこうした能率主義で律したならばどういふ結果になるであらうか。人間は四肢の筋と同じに鍛練すればこそ筋肉は立派に發育するのである。積極的である。それが使はれなければ筋肉は發達しない處か衰へる。實に玉磨かるる事により光を發するのである。此意味に於ては機械的能率主義がまゝ功利的に解釋され、二點間の最短距離を行くことが要領よしとされる。大なる誤りである。思ふ處深くなければ人は認識高からず、惱むこと大ならざれば人は悟る處深からず、鍛練する事大ならざれば眞の能率を擧げうる身心に完成され得ないのである。

こゝに人間と機械との根本差異がある。だが、人間も又見方によつては機械である。從

つて度を越した鍛練は、ことに發達期の兒童にあつては、過ぎたるは尙及ばざるが如しである場合がないではない。この量的關係の決定が實に兒童體育問題の實際に當つて第一義の根本問題でなくてはならぬ。

三

以上に依つて筆者は述べて見たいと思つたことの二三を述べたつもりであります。

これらの事柄が兒童體育の實際に當つて居られる方々に何等かの參考になれば望外の幸福である。（昭和十二年七月二十三日實踐兒童體育第二卷八號掲載）

三、斷種法に就ての一考察

一

廣い意味に於て、若くは之を突きつめて見ると地球上の人類の動きは、總じて生物學的なもので――と云つては話があまりに茫漠として捕束するに困しむであらうから、此望遠鏡的な觀察の中に少し肉眼的な若しくは顯微鏡的な文字を用ゐて説明を加へて見ると、世界の動向――政治外交は勿論のこと、經濟關係でも生産關係でも其等ありと有らゆる關係を加へて――は結局生物的な、もつと直截に云へば民族的なものである。學問の上から行くと、歴史なるものを文化科學の筆頭に置いて居るやうであるが、吾々生物學者の眼に映

ずる範圍に於ては――と云つては故障を申出るものもあるかも知れないが――民族興亡といふ生物的事實以外のものでは到底あり得ない。も少し顯微鏡的説明を加へるならば、智力、經濟力、團結力、生殖力といふやうな要因を悉く打つて一丸となした民族力の動きが世界の動きであり人類の動きである。政治、外交、經濟等々其等はいづれにしても人爲的な匂ひの高いもので近眼的に或る短かい十年二十年乃至一世紀位を標準にして眺めると、そういつた人爲現象によつて世界の動向が定るやうにも見えるが、自然の力は人爲現象よりは遙に力强く深刻であつて、結局動く世界は前記の生物的民族力以外のものでは斷じてあり得ない。若し此事實の證明を要求さるゝならば答は極めて簡易にして明瞭である。曰く世界史を生物民族學的立場に立つて讀んでもらへば足るのである。民族が生物的に勃興しかけると、國を擧げた戰爭の後でも、その創痍は二十年を經たずして治ることは現に歐洲大戰に勝つた佛蘭西が今や神經衰弱にかゝり、負けた獨逸が絶食療法の後見たいに元氣が恢復して行くことでも知れるのである。亡びかけた民族は蒙古の如く東の方日東帝國に對しては、弘安四年夏の頃十萬餘騎の敵を以て博多の海を壓し、西の方歐洲へはウラルを

越えて今日の獨逸の半ば、南の方印度へはカラコロム山を越えて大ざつぱに云へば世界の大半を領したあの蒙古民族が今日の哀れなる狀態はどうであるか。其他一々類例に遑がない。云はゞ民族にも亦壽命があるかの如くである。今一例を擧げるの類を加へるならば、伊ェ紛爭で世界の視聽をあつめて居る伊太利は、東ローマ帝國滅亡以來あまり勃興氣運のある民族とも思はれぬが、今日ファスチズム治下に外觀は新興イタリーと云ひ度いが、あれは民族のホルモン注射療法で、ゲルマン民族の若さとは自ら本質を異にして居ると診斷する。この實驗結果は案外早く鳧がつき二十年をも待たずしてそれがホルモン注射であつた事の所以が判りはしないかと思ふ。

二

前置きが甚しく長くなつたが、そも〳〵斷種法なるものを考ふるに當つては、少くもこゝから說き起さなくては眞の意味が徹底しないのである。外國に於ける斷種法の實施は已に三十年に近く、米國殊に加州に於て最も古く實施されて居るが、一九三四年一月以降ナ

チスの獨逸が民族主義的見地から貧乏世帶の所を政府は八百萬マークの豫算を計上し、差當つて先づ四萬五千人見當の處で斷種法を半强制的に施行し初めた時に世界は一寸視聽を峙てた。蓋し斷種法の眞の意味は民族を老化せしめざる唯一の生物學的對策でなくてはならぬ。ナチの獨逸に於て何人がこれを立案したかの詳細は知らないが、又その成果が三十年五十年の短日月ではつきり認識せられるとは限らないが、民族老化を防止して而して民族强化を目標とする點を狙ひ得たヒツトラーの識見の遠大さには、彼の有らゆる政治外交の手腕はさて措いて些か敬意を表してもよいであらう。

扨て我國の現狀はどうであるか、一九三一年現東大醫學部長永井博士により民族衞生學會なるもの新に誕生し、此學會を中心として我國に於ても又施行すべしとの主張がなされ、早晩議會の問題にならんとして居る。日本特に其中の大和民族の血液淨化運動が今正に適應時代に入つたか入らぬかの診斷は自ら別個の問題であるとしても、夫れは當然なる時代の成行きと見ねばならぬ。

三

扨て茲に到つて當面の問題として我國に於ける實施の問題になる順序であるが、その批判は(一)に前記する如く大和民族は現下この法の適應たるか否かに始り、次で(二)實施の範圍方法等に即して論ぜらるべきであり、其論議も單に民族衞生學的卽ち優生學的論據に止る事なく、別に(三)倫理的方面や(四)法律上の論義が重ねられるべきである。然し乍ら此事に對する論議は既に可なり多く重ねられて居る。例へば永井博士が民族衞生第三卷に公にされた「斷種法に對する反對の反對」又古屋芳雄博士が改造第十七卷第二號に物されたる「斷種法とその民族生物學的背景」等いづれも醫學者の立場からの立論として一般に肯定されてよきもの丶如くである。依つて筆者は其等の評論に涉らず、概論的な一つの考察として筆者自ら抱く若干の疑問を加へるに止める。

四

概論的の一つと云ふのは、上に擧げた(一)である。「大和民族は今や斷種法の適應狀態にあるか否か」と云ふのであるが、この疑問は一見して斷種法なるものに精通して居る人々よりは極めて愚問の切なるものである。何となれば本來斷種法の施行さるべき個々の適應者は惡質遺傳といふ嚴然たる科學上の根據によるものあり、實質的な事實的なものであつて疑問を許さぬ處であるが故である。筆者自身と云へどもその事實を敢て否定するものではない。百姓が若し出來の惡るい收穫物を來年の種に取つて置くと云ふならば、誰しもその愚を笑ふであらう。同じ意味に於てヒツトラーが昨年初頭以來の截斷が聰明であることは疑へない。然しもう一つ高所から見るならば次の事もいへる。ナチ政府が民族性あつて國家形成性なき猶太人をあれ程いぢめないでも立つて行けるとすれば獨逸民族の抱擁力——更に云へば民族力——は淸濁併せ呑み得る意味に於ても一つ大きいと云ふことになる。それと同じ論法で斷種法を施行するに適應する個々人はあるにはあるが、今の處大和民族はそれを抱擁して行きうるとすれば、行き得ないよりはより大きいといふことにもなる。斷種法は民族血液淨化運動であると共に民族老化への防止運動である。防止せざるを

得ざる狀態は少くも初老を意味するとも考へうる。宛かも能率問題の如く、能率を良くする必要が迫られる時は能率が其自身に惡くなつたことである。筆者は能率を常に二つに分け內部能率と外部能率とする。外部能率がよくなると內部能率が惡くなる傾向が少くない。一般に能率とは二點間の最短距離を目標とする。故に若しこゝに二人の旅人があつて一方は常に遠廻りをし、一方は常に近道をして、而かも二人が相前後して到達するとすれば、近距離を行くものは一見能率の良しきが如くして實際は惡く、他方遠距離を行くものは能率惡きが如くして實際にはよいのである。旅人が接近して居れば直ぐにも此判斷はつくが、東西兩洋の如く離れて居たり、又時間的に時代が一寸違つたりすると案外にこんな簡單なことが迷宮に入るものである。民族血液の淨化を必要とするものとせざるものとの關係も、亦この二人の旅人の如き關係があり得ると思ふ。

然し乍ら更に別個の想像も亦可能である。二人の金持があつて一人はつゝましく暮して行つたが、一人は多くの居候を置いて至つて餘裕を示した。一見して前者は小さきが如く後者は大きく見せ掛けられたのであつたが、トドのつまりは大きくやつて居つた方が動き

がとれなくなつてニツチもサチツも行かなくなつた。其時居候をやめては見たが最早如何とも挽回の途がなくなり、所謂臍を嚙んで及ばざるに至ることも考へられる。

想像は決してこれで盡きるわけではない。次ぎ〳〵に、だから滅びかけた金持の家に中興の祖が現はれるのであると云ふやうなこともありうる。然しそういつた偶然は暫らく措くとする。で以上の比喩は倫理的乃至法律的問題を除外して——かゝることが實際問題として大したことでないことは既に述べた處で明である——全く民族生物學的に考察した範圍のものである。二人の金持の例をとれば小さく暮らす法、卽ち最も慥かなる惡質の遺傳者に斷種法を施して行くことがもつとも常識的且つ科學的であるらしく考へられる。現に我國でも自由意志に基く、卽ち希望者には本法を施行して居る現狀であるから、落ちつく處はやはり識者の認める程度にいづれ本法も施行される事であらう。

五

筆者の疑問の一つは、これは誰れでも疑問とする處で敢へて筆者とは限らないが、本法

の施行によつて狂人と隣り合はせであると屢々稱せらるゝ天才の芽が、斷種法の實施によつて刈り取られはしないかと云ふ疑問である。此疑問に對しては嘗て吉益修夫學士が民族衞生第三卷に「優生學的斷種の精神病學的適應」の題下に於て、又永井博士の前述せる論文の中にも一部取扱はれて居る。この疑問に對する答へは、何分嚴密な科學的檢索なるものが未だ一世紀をも經たない上に、所謂天才と狂人の隣り合せた場合の實際例が、嚴密な意味に於て必ずしも多しとしないのであるから、當分疑問は疑問として留まるであらう。

だが、筆者はこの疑問を疑問として停めるが、これに對し別個の考へをも持して居る。と云ふのは、元來一つの民族に取つて天才や英雄を必要とすることは夫自身に於て何等かの弱味がある。日本の言葉ではないが「國危くして英雄現はれ」と云ふ句は最も良く其眞諦を道破して居る。天才や英雄や聖人が現はれねばならぬ時代が禍であつた、又ある、又あるであらうことは容易に首肯出來る。キリストや釋迦、孔子の出現は實に當時の腐敗せる世相の必然的結果として生れたものであり、現下歐洲諸民族乃至諸國家に於てケマルパシヤを筆頭に、ムツソリニー、ヒツトラー、スターリンを必要とする所以が國危きが故の

必然性產物であることは言を待たない——然るにも拘らず(これは餘談であるが)それに心醉して居るものあるに至つては愚や及ぶ可からずである——斯く考へると斷種法によつて天才の芽が刈り取られるであらうことは云はゞ杞憂以上であり、抑も天才を要求することが間違である。斯る意味に於て筆者は上記の疑問は疑問とするが、筆者本來の建前からは大した問題と認めない處である。

六

この一文の考察に於て、四・五の二章は蛇足であつたやうにも思ふ。筆者の斷種法に對する考案の建前は一般に本法に對して云はる優生學的見地よりの民族血液の淨化運動と云ふ定義に對して、民族老化防止法の一つであると云ふ考へを持つことである。筆者は社會有機體說を持して居り、其說のもとに絕えず民族壽命なるものを考へて居る。民族壽命は必ずしも個人壽命と同じに時間的に一定の制限あるものではない。故に國家政策は總て此見地に立つて民族を老化せしめざるを以て第一義とする。猥りに民族精神を作興せしめて

云はゞ民族感覺を尖鋭ならしむることは竟局に於て民族感覺を早老せしめる。斷種法に對する識者の批判はこゝを以て主眼とせられたきことこれ筆者の希望である。

七

斷種法は本來醫學的知識を以てその根幹をなすものである。我が國の醫學が對個人的啓蒙醫學より辛く大衆へ、社會へ、民族へと進んで行くコースは正々堂々の研究陣營であつて當然の道行きである。體質學、遺傳學等の知識は多くの豫防醫學的知識と相俟ち、更に高所よりの、卽ち常に二三世紀乃至十世紀位先きの處に眼を置いて達見し、日本民族をして巖となりて苔のむすまで光榮あらしめなければならぬ。屢々繰返す如く、夫れは民族的生物力以外のものではない、醫人はこゝにガツチリした基礎知識を把握しなくてはならぬ實に國防の第一義は個々の部分への特殊發達よりも、全體としてず民族力の涵養が第一である。筆者の案ずる處は例へば戰爭を例に引くとすると、戰爭の瘡痍が早く治るか治らぬかの民族的再生力(Regenerationskraft)が問題である。これを引くるめて一言に盡せば民

族の若さを保つことである。

總て自然力は一切の人爲現象を超えて遙に力强いものである。民族に於て又然りである。斷種法が如何なる意味に於ても民族老化への防止法の一つの手段であるならば、それは又當然倫理的乃至法律的問題を越えて居る處のものでなくてはならぬ。

(昭和十一年一月醫事衞生掲載)

五、民族と科學への隨想

二四、生活と世界
二五、疊の文化
二六、文化と放送
二七、青年學徒に寄す
二八、日本人の心臓

二、生活と世界

學するものゝ歡びの一つは、無限なる創造の世界を開拓して行く處にある。無限なる創造の世界とは何んであるか。吾々の生活は科學の進展と共に進展し、生々流轉の諸相は一時と雖も、停ることをしない。實に吾々の世界は日に月に新たである。是れ、所謂人生の創造であつて、學するものの絶えざる精進、念々として求めて止まざる心的過程の所産に外ならぬ。吾々が日常の實生活にあつては、太陽は朝に東窓に差し込み、夕に西山に沒することで充分であり、林檎はイヴの食はんとする以前より、熟すれば自ら其枝から落ちて居た。

地球が太陽を廻ると考へるガリレーの地動説、地球が林檎を引いたと考へるニウトンの

萬有引力說は共に餘計なことであつたかも知れぬ。啻この餘計なことから何が生れたか。森羅萬象は說明を與へらるると否とに拘らず、何の變りもない。變るものは只、吾々の生活と而して吾等の世界とである。

生々流轉の諸相一時も停るなき姿、是れ生命の實相である。

醫學が學である以上、この規範を脫するあたはず、醫術が醫學に連關し、更に醫業が醫術に關する以上、其業態、時と共に進展せざる可からざるは道の眞であらう。詩に云ふ千里の目を窮めんとする一層樓に登ると。（昭和十一年一月一日、慈大愛宕新聞）

三五、疊の文化

生活を離れて文化がないと同時に文化を離れて生活はない筈である。處で、日本文化と云ふものの特徵が色々の事柄を以て表徵されて居るが、筆者は近頃疊文化說なるものを提唱して居る。無論、筆者以外にかゝる說を提唱されて居る人があらうと思ふが、纏つた說として未だ接して居ない。扨て、此疊文化說の第一の特徵は「坐る」と云ふことである。これが衣食住の中、先づ住と衣とに連關すると共に體質權成にあづかるものと考へられる。日本人が水泳や跳躍に優れて居ることなどは坐ることゝ相當密接な關係があるだらうと思ふ。住としては在來の日本建築、殊に藁葺きの建物が冬溫く夏涼しく、從つて溫帶である我國に適合して居るとはよく云はれるが、夫れよりも此樣式から履物への關係を見や

う。疊の上では草履、下駄靴などは許されないから裸足か足袋である。西洋の春畫に女が靴をはいて居るのをよく見るが、凡そ氣分の出ぬもので下等の感じを持たれる。扨て、お茶や華等が日本文化の特徴の一つであることは云ふ迄もないがあれは皆疊から生れたやうな氣がする。支那や西洋のやうに家の中を履物をはき椅子テーブルではどうしても茶や華は生れさうにない。然し華の方は生れ得る可能性が無いでも無いけれども、その出來上るであらう處のものは疊文化としての華とは相當の相違が生ずべき事が想像される。床とか壁、障子とかいふものとの連關に於て、華の華らしさがあるからである。衣服の形が疊の上に坐ると云ふ事の爲に、どの位掣肘を受けたかは想像に難くない。日本文化の問題で兎角、問題になるのは衣服である。成程、どれが日本の正裝かと云はれると困る。上も下もぶつ通しの比較的にきくのは藝者の着物位のもので、吾々でも羽織袴では追付かない。其點は支那服程、上下一貫して居るものはあるまい。近頃裸の論語と云ふ書物の中に洋食は皿をまな板代りになし、ナイフを庖丁代りに使ふもので云はば臺所を食卓まで延長したものであるから、箸二本ですむ日本料理に較べると隨分と文化の低いものだと批評して居る

が一寸面白い。疊がよく非衞生的だと云はれる。家庭の中が往來の延長であり、靴のまゝで住んで居るよりは非衞生的でも我慢したくなる。況んや非衞生的であると云ふ事實の證明がどの位確かであるかは實の處あまり確かでない。

（昭和十一年一月一日日本醫事新報揚載）

三、文化と放送

一

近代の特徴は、色々な生活面から色々に云ひ表はして見る事が出來る。然し是を概括して見ると、筆者が好んで用ふる表現であるが「科學と民族の時代」であるまいか。

吾々の生活、もつと詳しく云へば、吾々の生活意識乃至生活感覺なるものは、本來相對的なものである。從つて夫れは、多分に時代的特徴に順應し又支配されて行く。そして、その時代的な生活感覺が亦來るべき時代の傾向を創造して行くのである。これが所謂文化の交流であつて、その停まる處を知らずに進んで行く過程が人生の、又世界の進んで行く

過程に外ならぬ。

二

さて斯やうな科學と民族の時代にあつて、その最も特徴的なものを擧げるならば、ラヂオは確にその一つである。人類の最初に發明した文化財は、云ふ迄もなく言葉であつた。此言葉から文字の發明までには、どの民族でも相當の年代を經て居る。而して、その言葉と文字とは、筆墨紙の發明によつて、漸次人間の精神生活に遠隔作用を可能ならしめ、更に印刷術と通信機關・輸送機械の發達とは、一方には書籍と云ふ世界共通の文化財を產み、他方には郵便、電信、電話、ラヂオと進展し、昔の文函は今では風韻を語る骨董品となり終り、英國では現に電話を掛け乍ら相手の顏が見える處迄テレビジョンが實用化された。これはひとり通信・輸送の機關と限らず、照明法でも、行燈からランプ・瓦斯燈・電燈と進み行くのと、駕籠から人車・馬車・汽車・汽船・自動車・飛行機と進んで行くのと全く同じである。茲で特に注目しなければならぬのは、その進み方のテンポが如何に早いかと

いふ事だ。

科學の力は、相對的な意味に於てこの地球を洵に狹いものにして仕舞つた。然しそれと逆に、人間の精神的世界をば限りなく擴大して行きつゝある。前年のベルリンのオリンピックも、今年の大英國の戴冠式も、まのあたりラヂオを通してその實現が知られるなどは手近な一つの例證に過ぎない。文化と云ふのは、謂はば人間の精神世界の、その世界地圖が段々廣くなると云ふことに外ならぬ。

扨て斯やうに見て行くと、ラヂオなどと云ふものは、世界に於ける各國家の文化度の標準になるやうなものである。聞く處によると、最近日本ではラヂオの聽取者が三百萬を突破したそうである。米國の二千四百萬、英獨の各七百萬迄にはまだ及ばないが、フランスと日本とは先づ伯仲の間に在る。慥に各國の文化水準を物語つてゐる。然し、日本の家屋の構造から考察すると、日本では西洋の樣に一部屋一部屋嚴重に區切られた建物、或は又アパート式の一人住みのものが割合少いから、恐らく實際の聽取者の數は、英獨に匹敵するのでないかと考へられる。

三

扨てラヂオが一國の文化と重要な關係があるとして見ると、放送事業と云ふものは重要な國家的使命を持つてゐることになる。これは放送事業の當事者達が十二分に心得てゐられる處で、敢へて筆者の如きが四の五の云ふべき筋合でない。だが、何かラヂオに關係した感想を書けとの註文であるから、こゝに筆者は心臟を强くして、放送に就ての素人注文なるものを一つ二つ並べて見よう。

先づラヂオに關する限り、筆者の第一の記憶を呼び起すと、最早十餘年になるが、最初に受信裝置を取付けた時、正にサラリーの半分を投じたあの大恐惶の狀態を想起せざるを得ない。科學の世界のテンポの早いことは既に述べたが、その機械は勿論二三年の中に十分の一位の値段になつたやうだつた。

其處で、放送局は、一方には聽取者を募集する權利があるのだから、他方には聽取者に安くてよく聽取れるやうな受信機を世話してやるだけの義務がある。放送研究所の精華で

あるべき受信器を、何號何年型と云ふ風に、年々の進歩に應じて、分賣してやるのが親切であらう。但し、これは、實際にはやつて居るので、筆者がうかつにも知らずに居るのかも知れぬ。一方又若しこれが商人の營業を壓迫すると云ふやうな理由の下に、實際やつて居らぬやうなことがあるならば、それは確に考へ違ひだ。若しそうだとすれば一遍考へ直す必要があるであらう。

さて、これは放送をしてもらつたうへ、受信機まで世話をしろと云ふ虫のいゝ素人註文だが、次に放送内容に就いての註文、實を云ふと筆者自身、こんな隨筆を書かうと云ふのに、聽者としては甚だ以て不誠實で、めつたに聞いたことがない。其處で、この註文はピントが少しはづれて居るかも知れぬ。が然し、聽取者は皆が皆忠實に聽く人のみとも限るまいから、勝手な文句を言つて見るのも何等かの參考にはならう。そこまでまづ筆者の聽取するはどんなものかと云ふと、實はあまり高尚なものでない。地方俚謠のいゝのを撰擇して聞く位が關の山である。これも、近頃は幾分玉石混淆の傾向があり、特に都會人が地方俚謠をやるのは、ローカルカラーが出ないでどうも面白くない。從つてよいものは、地

方の局からの中繼だが、從來仙臺放送局などは、中々この方面に力を入れて居たやうだ。だが、近頃局長でも變つたのか、其特徴がなくなりかけたのは殘念である。扨て、この一事でも判る事だが、放送家のリストと云ふものは相當大事なものであらう。勿論、中央放送局には整然とそのリストが整へられてはあらうが、これは一つ大に專門家をもわづらはして立派に作製して置く要があらう。

地方俚謠しか聞かぬ男が、全放送内容への註文も烏滸がましい次第だが、扨て又一般の放送を聞いて時々氣がつくことは、内容がよくても話術が拙いなあと惜しまれるのが相當澤山にある。放送者の方から云へば、忙しい處を放送するのだから、話術どころかと云ふかも知れないが、聽者の方から云ふと、折角聽いてやるのに、判る話まで判らぬやうに、面白い話まで面白くない樣に話すとは人の貴重な時間を盜むも同罪、もつと氣のきいた話をしろ、パチンとスウイツチを切る、といつたわけである。

さてこの事でつら〳〵考えて見るに、日本には一體話術と云ふものが發達してゐなかつた。話術に限らず、總てものゝ表現が西洋と反對である。西洋は外向的、日本は内向的で

音樂でも日本のものは人に聞かせるよりは自ら樂む處の所謂「行」としての音樂であり、繪畫などでも人に見せるより、自ら「線の行者」として行ずるといふ傾向が著しい。演說でも同じ事、西洋では紀元前からデモステネスなど云ふ大雄辯家が居て、デモンストラチオンといふ言葉は方しく夫から來て居る位だが、日本では辯のきくのは安つぽいと、幾分下等な存在ですらあると見做された傾向がある。支那になると、これが相當に買はれ、文獻ではかの有名な蘇奏張儀が、舌一枚で連衡合從を策したと傳へられる。日本では、弘法大師や日蓮のやうな人でも、あまり雄辯であつたとの記錄がなく、偶々話術効果を擧げた第一人者會呂利新左衞門は、實は話したのでなく秀吉の耳をかゞせてもらつて充分に奏効したと云ふ風で、慥に話術は尊重されてゐない。若し日本で强いて例を擧ぐれば、二・二六事件の折のあのアナウンス等は歴史的に、又あらゆる他の意味をも含めて、最大効果をあげたものと謂へやう。

其處でアナウンサーと云ふものは、今日はニュースの外に、特殊技術として運動放送を擔當して居るが、あれをもつと一般に押し廣めて行く必要がある。例へば日本文化講座、

世界歴史講座などと云ふものがあつたとすると、歴史家の語る所は內容はよいかも知らんが、面白味がないと話が死んで仕舞ふ。如何によい料理でも、食器が拙く、座敷が整はずお給仕が惡かつた日には代無しである。だから、歴史の話し振りは、貞山や伯山の講談まで行かなくとも、多少それに近いものにトランスホームすることが極めて必要だ。然し之は野球や角力放送に較べ相當の教養が要るから、相當の資本を投じて放送士と云ふものを養成する必要がある。放送局は隨分もうかるらしいから、放送士養成所—放送大學なるものを設立せねばならぬ。丸で、ギリシヤの昔に還つて話術鍛練時代の再來の樣な話であるが、苟くも人に話す以上は、人の貴重なる時間を借用すると云ふ良心的放送者でなければならぬ。尤も筆者の云はんとする處は、單に面白くするのが目的ではない。話を生かしてそれをよく印象づけ、翫味し、批判してもらつて、民衆の認識と文化を高めて行かうと云ふのである。

四

めつたに聞かぬラヂオでも時たま聞いて話術の甘いのに全く感心することがある。今年になつてからだが、金田一と云ふ文學博士の方が、何時か「牡雞の貞操」と云ふ十五分の短いラヂオ隨筆を放送された。その內容は一寸聞くとつまらぬやうであるが、實によく描寫されて居ると共に、言葉に抑揚があり、而かも雞の社會が又人間の社會にうまく對應させられて行くところ、洵に示唆に富んだ興味ある話であつた。それが今でも忘れずに居る。放送として實に滿點であると——失禮であるが——思つた次第であつた。

五

放送家リスト、放送士養成所設立案から、も一つ素人註文を高揚させて見るとどんなことになるだらうか。一ト月の間何もしないで放送だけをみつちり聞いて居つたら、相當の物識りになるだらうと思はれる位內容が豐富である。吾々は啻多忙のためにめつたに聞かぬだけだが、惜しいものである。既にテキストが出版されて居るのだから、放送新聞と云ふものがあつて、面白そうな講演やその他を網羅したものが出來るならば、四大言論雜誌

と一般娛樂雜誌の中間讀物として、その文化價値は相當なものであらうと思はれる。

扨て全放送の內容は、ラヂオ體操の國民健康助成から、教育、娛樂、實生活への役立てニュース、時事解說等洵に至れり盡くせりであるが、只日本に於ける放送は今少し政治教育の方面や又社會政策的な方面に應用されないものかと考へられる。卑近な例を擧げて見ると、今日日本で國民體位の問題が大層やかましい。實際「命あつての物種」と俚にあるが、國民の健康あつての國家であるから、それへの注意の喚起は極めて短い言葉で充分に足りる。だからそれはラヂオ體操の後のレコード音樂の一枚の時間で充分事足りる。例へば今迄は人は死亡の時だけ診斷書が要るやうになつてゐる。死んでから先は診斷書も一向用をなさぬ。寧ろ出產診斷書こそ必要なのである。かくて戶籍と同じに健康カードが作られるまでに國民の健康の問題が重要視されるやうになるだらうなどと云ふやうなことを挿話して見るわけである。かゝる注意の喚起は放送事業の收益の一部を結核豫防事業に投ずると同等、或はそれ以上に効果があるかも知れぬ。

政治教育だつて同じ理窟であらう。

最後に一つ、放送事業の國家的使命の一つが文化の啓蒙にあるとすれば、ラヂオは都會よりも更に農漁村にうるほはねばならぬ。日本の將來への惱みの一つは都會文化と田舍文化の著しい差が出來ることにあるやうに思はれる。

（昭和十二年五月東京放局機關誌放送掲載）

二七、青年學徒風景の點描

一

人の心に最も直接に訴へるものは音樂だらうとよく謂はれる。であるから、音樂は藝術の中で最高位を占むべきだと簡單に斷ずるわけにも行くまいが、春先きになると、小學校などの卒業式場から「螢の光」や「仰げば尊し」の歌のメロデーがよく洩れて來る。毎年感ずることだが、あれほど私の心を打つものはない。あのメロデーを聞いてゐると、少年の日の姿、故里の山も川も、またある時はありのすさびに憎かりし人々の姿さへ、まざ〳〵と腦裏に浮かんで來る。不惑の年ごろを過ぎると、少年時代の記憶は大方雲烟模糊として

來るのが普通である。その中から何物かを呼び起し、呼び醒すのは慥かにあの螢の光の歌のメロデーだ。

二

學校行事のかき入れ時に、毎年きまつて聞かされるのは、試驗地獄の名稱で吹聽される入學難と就職戰線の異狀である。處が今年は、入學難は慢性症狀になつたのか、それとも尨大豫算をめぐる政治問題におほはれてか、あまり深刻の叫びが聞かれなかつたやうだ。一方就職戰線の方は、これまた慢性か、それとも軍需インフレの景氣で解消したせゐか、戰線極めて平穩である。さてこの方面もいはゆる三十五、六年の危機を突破した姿であるといふのか。

現在は瞬間である。歷史の歩みは、移り行くその瞬間を境としながら、未來も、將來も次々に過去の中に葬られて行く。かゝる過程への認識に立つて眺める時、この國の將來に取つて何が一番重大事かといへば、それは結局この國の將來を荷つて行く彼等第二國民た

る青年と第三國民たる少年の動向以外にはあり得ない。人間社會のあらゆる制度、あらゆる機構、それは皆人間の作り出したものである。だから、將來のよりよき世界がそれらの人々に待つより外にないことはあまりにも明らか過ぎる。

ところで、その將來の人を作る教育機關、卽ち學校風景なるものは時代と共にどのやうに移り行きつゝあるか。小中學程度のところは暫く問はず、上層の學校に一瞥を與へて見ると、一昔前は學校騷動といふのが中々多いものであつた。が、今では殆ど跡方もない。次で起きたのが思想問題、是亦時代の趨勢と共に解消した如くである。

かゝる學校風景に卽して親身の心配事がまた必然的に變つて行く。何とかして放蕩に身を持ち崩さぬようにと案じた昔は隨分溫床的なものであつた。次で赤くならぬようにと、やゝ社會的色彩が加はつて來た。さてその心配が今日は何處に低迷し乃至は止揚されてゐるのか。恐らくは經濟問題と聯關した就職問題などが主なるものであらう。だとすると、それは當然過ぎるほど當然のことであるから、逆にいへば、昔の意味の親の心配などいふものはとうの昔に解消したといふことにもなる。

一方青年學徒の方から考へると、彼等の認識は、彼等の文化は、この境地まで征服しもしくは止揚して來たといふことにもなる。ところが、この四五年の間、日本民族は大陸政策なるものを契機として轉換期にある。世を擧げて非常時の聲がかまびすしい。然るにだ。かくて文化の次第に高揚し來たつた青年學徒の世界はその非常時の眞只中にあつて、實に稀に見る波靜かなる風景ではないか。國家にとり、もつと直接には教職にあるものにとつて、誠に有難いような話でもあるが、さて靜かに省みる時、それでよいのか、といふ一抹の憂ひが湧いて來ないではない。

三

生々流轉の諸相といふ。感覺も思想も時代と共に移るのは當然であるが、青年學徒の世界が世と相反して洵に波穏やかであることには多少の檢討が必要であらう。それは總てものの働きには二面を持つからである。そこで筆者は先づ精神的に、次で肉體的に一、二の考察を加へて見よう。

彼等の全般的態度、いはゆる波穏やかなる風景をもつて文化の昂揚に因ると見做すことは一應肯定されて然るべきである。少くも明治大正年代の學生に比較して社會の一般事象に對する批判力は著しい進展である。然しながら、文化の働きにも二面あつて、榮ゆるも文化、衰ふるもまた文化である。榮ゆる所以のものは、表面波靜かであるが、内に念々として求めて止まざる氣魄がたゞよふ場合である。向上の一路が内部的に湧きあがる、いはゞ靜かな暴風である。

然るにその衰ふる所以のものは表面的には、批判力の增加が非行動性を呼び起したるが如くであるけれども、もと〳〵その批判力は體驗を伴はない、體識されない批判力であるために、あまりに現實を肯定し、否現實に安住しまたは適應し過ぎて理想を失つて仕舞ふ結果、内部的な向上の一路を失ふところにある。他の言葉を用ふるならば、全く功利的な立場にのみ追込まれた姿である。

理想を追ふべきはずの青年學徒が、何時の間にか明哲保身宗の宗徒と化し、圓轉滑脫の紳士化をなしとげた形である。かくのごとく青年が青年らしさを失ふならば、彼等によつ

てのみ招來されるであらう將來のよりよき世界が、何處に期待され得ようか、現代の青年學徒には多分にかうした風景が展開してゐるように觀取される。

筆者はある種の興味からこの五六年、學生票といふものを作つて、日常の愛讀書、購入諸雜誌の種類乃至彼等の趣味生活の一般を檢討してゐるのであるが、彼等の多くは愛讀書を持つてゐないことなどはその一つの證左となるであらう。

元より青年學徒のかゝる傾向は、一方には學校教育そのものの職業教育化、他方においては一般の社會情勢が、卽ちその一つを擧ぐれば資本主義經濟機構の人間機械化作用があづかつて力あるところではあるが、若しその渦中に卷込まれ終るとすれば、どこに彼等の昂揚した文化や批判力があるかと反問したくなるのは當然である。

四

抽象的な論議をやめてもつと具體的な問題に入つて見よう。現代は科學の問題と民族の問題の時代である。科學の問題に措いて將來へ見透しをつけようといふのは木によつて魚

を求むるより至難である。こゝでは科學はもちろん廣義の意味である。また民族の問題、この根强い生物的な事實を措いて人間の世界が動くと思ふならば、それはまたあまりに愚である。

そこでまづ第一にその科學に對する青年學徒の考へを見るとき、彼らは科學の功罪——この言葉は惡いが後にわかるであらう——に對する觀念がはつきりと把握されてゐない。現實の世界はいふまでもなく世界を擧げて準戰時代である。

スペインのような戰爭競技場があるので僅かに小康を保つてゐるような有樣であるが、英國の軍擴、降後十ケ年二百五十億圓、フランスの二千四百億フラン、ソ聯のドイツの、等々。かくて蓄積されつゝあるポテンシヤルエナージーは自然法則に從つて次第にデスチヤージすべき確率を增しつゝある。しかしそれらのポテンシヤルエナージーは悉く科學力に依存する。そこでは毒ガス戰、細菌戰等々あらゆる非人道的な方面への科學力の發展である。が、飜つて考ふるに、科學はかくの如く非人道的な方面に用ひられるがゆゑにこそまた同時に最も人道的な方向に向つて用ひられるのである。それは、毒であるもののみが

藥として働くことが出來ると同樣に、大いなる惱みあるもののみが大いなる歡喜の世界をもつと同理である。現實の世界に安住すべく時間的に運命づけられたわれ〳〵は兎に角として、將來の世界に關心を持たねばならぬ彼等青年學徒は、この一轉向への理想を抱いてもよいはずである。にも拘らず一向持つてゐさうにない。これ全般として彼等の科學への把握が不充分である最も確かな證左である。民族の問題に對する彼等の理解の程度については殘念ながら述べる餘裕がなくなつてしまつた。

五

つぎに彼等の肉體的な方面に一瞥を與へて見よう。元來彼等が高等專門の教育を受け得るのは選ばれたる少數の第二國民として、將來この國の一般社會の指導的位置を占めることを約束されてゐるようなものである。彼等の惠まれてゐる點は、單に知識を與へられることよりは、實は肉體的に充分の發育を就げ得る機會が與へられてゐることである。人間としての心身發達の完成期は廿歳前後であるが、彼等は啻にこの時期まで自由發育の狀態

にまかされてゐるのみならず、國民三大義務の一たる徵兵に於いてすら猶豫の特權を與へられて保護されてゐる狀態にある。

換言すれば彼らは父祖傳承の資質を完成すべく充分の機會が與へられてゐる。前文部大臣平生氏の義務教育延長案の科學的根據は日本勞研の暉峻所長が實驗的事實より指摘したるが如く、少國民をして幾分でも父祖傳承の心身の資質を完成すべき機會を延長し、國民全體としての能力の發達と充實とより、ひいて民族的向上を企圖せんとするところなくてはならぬ。かゝる事態に鑑みる時、如何に彼等が惠まれたる狀態に置かれてゐるかについて十分の認識を持つて然るべきである。が果してその點は充されてゐるであらうか。日本に於ける女子の體位の向上は實に女子教育の發達の必然の結果として喜ぶべきである。青年學徒のそれは、女子に比して著しくない。近視の著しい增加、結核——これは學生のみとは限らぬが——のために落伍するものまた相當數である。

大學專門學校の卒業者は凡そ入學者の八割强となり、何年かの修學期間に一割二割の落伍者を見るのが一般である。スポーツの發達は一面喜ぶべきが如くして、しかもその特殊

競技化は一般青年學徒の體育問題とは全く無干渉になりつゝある傾向が著しい。こゝにわが國の高等教育の方針は時代に卽して或る轉向が要請されるに充分でないかと思ふ。

國民體位の問題は何處から起つて來たか。聞くところによると年々壯丁の體位が低下するといふ。民族國家としてこれより重大な問題はあり得ない。恐日症のソ聯はこの國の壯丁の體位が年々低下するといふ成績を盜見して、日本の將來知るべきのみと簽竹を割り、安堵の溜息を洩らしたと云ふ。これは簽竹ではない。方しく科學的認識だ。軍部の不安はソ聯の安堵の溜息が終るとともに初まつた。などいふ巷間放送もある。

それはひとり軍部の不安のみであつてはならない。實にこの國にとつての最大關心事でなくてはならぬ。壯丁の體位の低下は一方において充分の再吟味が要請されるが、他方においてはその因つてる社會的要因を突きつめて、これが方策を樹てねばなるまい。一方また徵兵制度自身にも若干の檢討が與へられてよい。科學戰の時代においては問題となるのは、單なる體力のみではない。第一第二乙種のものにおいても適宜の訓練によつて充分特殊の性能を發揮しうる可能性がある。（昭和十二年三月、大阪毎日新聞掲載）

二八、日本人の心臓

序

前號の科學と文化を語る座談會の折、菜食者は肉食を主とするものに較べるとその心臓が强過ぎる。結構な話だが、一方から謂へば、死に際が惡くなる譯でもあると、うつかり口を滑べらした處、ジャーナリズムの第六感と云ふ奴に觸れて表題の樣な注文が來た。兎や臺の心臓ならば、直接間接、その生理學的研究に手づさはること二十年に及んで居るから話の種に困ることは無いが、人間となると、多少知つて居るのは運動家の心臓位で、それが更に「日本人」のと云ふ餘計な形容詞がつくと、正にこれは近頃流行の科學の民族性

ではない心臓の民族性と云ふ問題で、一向不案内である。然し、まさかこゝで生理學や醫學的知識を振り廻はさせるのが本旨でもあるまいから、謂はゞ表題に對して、筆者が何を感覺するかを問ひ質したいわけであらう。謎を掛けられて居るか、試驗をされて居るやうな譯である。この答案其の物が既に相當心臓の强化工作を必要とするやうである。

因緣と云ふ奴は實に妙なものだ。筆者は本來こういふ新しい言葉や其の他一體に新しいものに對し好感を持つ性質に生れ付いて居ない。從つて、そんな新語などめつたに使はない。處が、處もあらうに、去年生理學會の席上で、どうしてもこの新語を以て表現しなければうまく表現されない事が起つて、甚だ不本意の次第ではあつたが、止むを得ず此言葉を使つたのである。つまり、或時代の感覺を表す爲には、時代的な言葉の必要が起る。其處に社會生理的な必然性があるわけである。長くなるが、一寸一件の概要を摘錄するとこうである。偶々筆者が座長をして居た時、二十分の約束で報告演說をした仁が、再三の注意にも拘らず、延々遂に五十分を超えて仕舞つた。何時もの學會ならば、特別講演ぢやあるまいし、ヂヤン〳〵とベルを鳴らす處であつたが、此の年から初の試みとして、學會の

雰圍氣を和やかにしようと云ふんで、報告を座談的にし且又紳士協約的にベルを廢した—勿論此の試みは大成功で、これがほんとのノーベル賞だと讃めた仁があつた位であつたが——さて、後刻座長の總括報告の際、この事件を如何に批判せんかに苦慮した擧句、遂に「心臓が强い」と云ふ表現を用ゐざるの止むなきに立ち到つたのであつた。此表現の近代的感覺が何處にあるか、云ふ迄もなく、それは一元的でなく二元的、一側的でなく兩側的、六つかしく云へば明暗兩性を備へ、ダイアレクテイクな、卽ち辨證論的なところにある。之を例へば、筆者の若い時代によく用ゐられた生理的表現は「腹が据つた」とか「腹が出來たとかであつた。處が明治文化も末期に近づき、次で大正に入ると「頭が良い」と云ふのが一切をリードし、腹から頭に登つた。然るに大和民族が、そろ〳〵大陸政策に轉換する時期を契機として、「頭の良い」だけでは追つかぬ事になり、遂に心臓に來た。而かも其の表現は、腹が据つたとか頭が良いとか云ふ一方向的なもので無く、抱擁力の極めて大きい、褒めたと思へば褒めたが如く、けなしたと思へばけなしたが如く、隨所に主となると云ふ句に相當し、おのがじし勝手に良いやうに解釋されるプロバビリテーが頗る多

い。蓋し思想の無彼岸時代には、誂へ向きの表現である。近頃「心臓の強い」が流行するのを奇貨とし、更に進展せしめて「膀胱が大きい」など〻表現する者があるがあまり感心しない。昔から解剖的生理的表現には首が廻らぬ、度胸がい〻、腰が低い、口幅つたい、腹黒い、尻の孔の小さい、膽玉の大きい、血の巡りの遲い、目から鼻に抜ける等々、その極めて一般的なものから、更に各論的な感覺生理學などになると、近視的な、目が高い、鼻につく、澁いの辛いの、酸いも甘いも嚙み分けたから、味氣ない世など〻、到底一々數へるに遑がない。が、心臓の強いなど云ふ表現は「良心的」と云ふ言葉と共に、實に多分に近代感覺を盛つた言葉として秀逸の部である。

扨て話は長くなつたが、過日敬愛する同僚の一人に巡り逢つた處が、「心臓が強いと批評された其の人より、學會の席上で心臓が強いなど云ふ言葉を用ゐる方が餘程心臓が強いぞ」と云はれて、今更に「己れに出でたるものは己れに還る」と云ふ諺の僞りならぬ事を體驗した。が、「あ〻それなのに」と云ふあの下等ないやな唄に、餘りに反感を持ち過ぎた結果、牛に牽かれて善光寺參りをしたと同樣、遂に覺えさせられて仕舞つたと告白した

人がある事を一言附記して置いて、扨て本論に入らう。

一

強心劑と云ふ術語はあるが、強心家と云ふ術語は未だ見當らない。「日本人の心臓」と題し、心臓の民族性を論究する事は、結局「本朝強心家列傳」乃至は「本朝強心家番付」でも作るより外あるまいが、時代の特徴は民族問題と科學の問題に集中されて居る樣であるから、いづれ此の方面を主として物色しなければなるまい。處が民族史の問題になると筆者不幸にして歴史に審かでない。一方科學の方面は、本年始めてこの國に文化勳章の制定があつたと云ふやうな次第で、今や日本は、科學に於てもどうやら紳士の裝ひを裝ふまでに立到つたが、何分にも歴史の淺い淺ましさ、響くものはあつても打つものなく、踊るものがあつても笛を吹くものが出る迄にはならない。嘗て後藤新平さんが、全體觀の提唱者ドュリューシュを招聘したのは震災前かと思つたが、今日この國で全體觀が流行して居るのと思ひ合せると、慥に後藤さんには先見の明がある。それからアインスタインが來朝し

相對性原理つて何だらうと女學生の質問が殺到した當時から較べると、マトリツクス力學の創設者ハイゼンベルグや此學說の展開者デイラツクがやつて來た頃は相當文化が高揚したやうであつたが、一等國の碩學知識が、現在デンマークと云ふ小國のボーア博士を招聘して、その颯爽たる學動にあやかつて居ると云ふ次第であるから、こつちからも交換教授以外に、少しは名ざしで向ふから招聘されるやうなのが無いかなアと癪にさわつて見る位が關の山で、殘念ながら科學の世界では「本朝强心家列傳」に列記するのが見當らない。强て擧ぐれば、紀州は田邊の片田舍に夏になると褌もしないで丸裸で町を歩く南方熊楠と云ふ世界的粘菌學者と自稱する特殊の心臟の持主がある位だ。宛もよし、今年此時、心臟に關しては心臟ホルモンで苦心二十年、ノーベル賞にありついた仁がある。だが、これもデールにレヴイーと云ふ異國の生理學者である。

其處で、科學の世界は止むなく放棄し、他の世界を瞥見するとチラ〳〵網にかゝりそうなのが見當らぬではない。ホーマーの名詩イリアド・オデツセイに眞似て一つ不朽の名詩を作らうと、ローマに火を放つて燒き拂つたネロ皇帝の心臟に對し、振袖火事の張本人八

百屋お七の心臟を引き合ひに出すのもどうかと思ふが、アレキサンダー大王に、何か望みはないかと問はれ「陛下よ何も望みはない。だが、其處のところを少しどいてもらひたい。日なたぼつこの邪魔になる」と云つた桶の中の哲人デオゲネスの心臟位に相當する心臟の持主は相當にあるやうである。

何と云つても東洋は精神的、唯心的であるから、宗教人に偉大な人物が輩出して居る。が、其の中で殊の外心臟の强さうなのを物色すると、先づ日蓮上人、道元禪師、之を近代に物色すると內村鑑三氏などは、あの妙な英語を臆面もなく使つた度胸、正に相當なものであらう。

史上の人物は何といつても舞臺が大きくなければならぬ。封建時代の國內鬪爭では、況んや、キングや講談雜誌におなじみの劍客ややくざの世界では、荒神山の血烟だの、何だのかんだのといつた處で、高が水滸傳の黑施風李旗や豹子頭林沖位の傑さが關の山でお話にならない。從つて日本史を眺めて先づ目につくのは、大和民族の大陸政策の具現者として古くは神功皇后、中古は豐臣秀吉、明治維新では西鄕南洲を擧げねばなるまい。而も嶄

然として一頭地を抜いて居るのは、何と云つても秀吉だ。下つて國際的のものになると、少し疑問はあるが北條時宗を筆頭に、倭寇の親方山田長政や支倉六右衞門等々、夫から初めて國内的な源平時代より戰國時代の武將と云ふことになる。が、斯く比較檢討して見ると、滿洲事變の際、ソ聯がまさか北滿鐵道は越えて來まいと高をくゝつて居たのに、昂々溪から蒙古が出來たが、チチがハルと云ふチチハルを越え、北は黑龍江、西は熱河省を越え、秦の始皇帝が豫て區劃整理の爲めに作つて置いて呉れた萬里の長城をも早速利用した某參謀などは、ナポレオン崇拜家だけに相當の心臓の持主と診斷される。

二

さて先づ神功皇后の古へでは、武内宿禰と云ふ忠臣、三百年も生きたと云ふから、桁はづれに强い心臓の持主が居たものではある。朝鮮遠征の大將大友の狹手彦に戀をした佐世姫か、石になつたと云ふ時代であるから、史實概ね雲烟模糊として、ピンボケがし、苦蒸し過ぎて居る。依つて稍史實の明かな時代を撰び、秀吉の心臓から診察する事にする。

卑賤に身を起し、幼少にして泥的、蜂須賀小六の配下に天晴れ當年の不良少年振りを發揮した彼猿面冠者は、やがて宇内を統一し、次で鉾先を唐天竺に向けた。秀吉の征韓軍の先鋒が釜山に上陸したのは文祿元年（西暦一五九二年、コロンブスの亞米利加發見後一百年）四月十三日であるが、五月三日には早くも京城を陷れ、六月十五日には平壤を、斯くて僅か二ヶ月の間に殆ど朝鮮全土を平定した。當時の文化に對應して考へると、正に熱河工作以上のスピードである。秀吉の心臓が先づ以て家來の度膽を拔いたのは其の前年の事である。「お前一寸釜山までいつて、そこの海岸に米三百萬石を積んで來い」と長束大藏少輔に命令した。少輔は狐につまゝれたやうな話で、「恐れ乍ら殿、只海岸に積んで置くだけで宜しう御座居ませうか。それとも先方の預り證でも……」と云つた處が、秀吉カラ〳〵と打笑ひ「三百萬石と云ふ米は言葉ぢあ一口だが積んで見ると相當なものだ。だまつて置いて來ても、空恐しくて手などつける者はない。只だまつて置いてくれればいゝのぢや」と鶴の一聲。これが當時の軍需インフレの聲と共に忽ち世間に喧傳されて仕舞つた。扨て翌年の朝鮮征伐、京城が陷ると間も無く秀吉が、秀次に與へた書面の中に「朝鮮の都

も陷落した。其方も來年正月頃には出陣の準備をせよ。今度は大明國を從へ、其の方を明國の關白にしてやらう。いづれ明後年頃には後陽成天皇樣の行幸を仰ぐ樣にならう」と云ふ文句があるかと思ふと、名護屋の陣中から秀吉の意を受けて山中橘內が、浪花なる太閤樣の女中の許に送つた手紙の中には「太閤樣は一旦北京の都を御座所にするか、又は誰か適當の人物を配して御自身は日本から船付の便利な浙江省寧波を御座所に定め、戰爭の都合では天竺から南蠻まで攻め入るおつもりである」と云ふやうな記錄がある。大亞細亞主義の壯圖は實に三百年の昔に於て此の英雄の精神に具現されて居る。秀吉の目論んだ日支條約七ケ條を見ると、其の第一ケ條に「明帝の皇女を以て日本の皇姙に容れる」と云ひ、第四ケ條は「朝鮮八道の內當分四道を我國に屬せしめる」とある。而して其の條約に附記された告諭文の中には「それ日本は神國なり」と國體を明徵にしたる後、「余は旣に遠島諸國を征服した。大明國も亦之を希ふ處にあらざるか、我が朝は小國なるが故に、之を輕んじ蔑るならば、兵を率いて大明を征服せん」と云ふやうな言葉が記載されて居る。事實彼秀吉は明國との媾和談判進行中に臺灣遠征を企て、明兵十萬を蹴散して、琉球を共に我

國に朝貢せしめた等は、正に秀吉の圖南の志が如實に現はれて居る。處が、燕雀大鵬の志を知らずと云ふのが昔から相場のきまつた社會法則である。秀吉の三奉行の如きは、早く媾和を成立せしめやうと、祕かに秀吉の七ケ條の要求を誤魔化し、甚だ屈辱的な平和條約を以て一時を糊塗せんとした。今から考へると、〇〇外交同然で、洵に愚にもつかぬ事になつて了つたものである。處が、面白いのは條約の用語の問題である。秀吉は假名交りの邦文を用ひよと命じたのだが、秀吉のおかゝへの漢學者は、何時の間にか下手な漢文に綴つた上、「日本國王豐臣秀吉書を大明國皇帝に奉る」なんどと、途方もない國辱文を書いて了つた。然し、こう云ふ認識不足の學者は、決して秀吉の時代と限つた譯ではない。現在でもザラにある。と云つて秀吉自身は決して獨善主義では無かつた。彼が使つたと云ふ扇子にはナサライ(儞茶來、お茶を持つて來い)、ナチュライ(儞酒來、酒を持つて來い)、シンシン(進々、近ふ寄れ)などと、日支會話を書いては覺えた處など、實に秀吉と云ふ人物は愉快な存在である。惜しむらくは好漢の死がその勇圖を坐折するの餘儀なきに至つた事だ。蓋し秀吉の心臟は日本精神を代表するものとして、日本强心家列傳の筆頭の資格

は正に充分なるものと認められる。

三

澎湃として興りつゝあつた日本民族の進展力は、幕政三百年を經、これも亦ボテンシヤルエナージーを蓄へる爲めに夫れ相當の意味があつたのであるが、御一新を契機として遂に具現された。其の詳細は歴史家の審かにする處で、此處に喋々を要しないが、見逃がし難いのは當時に於ける南洲の征韓論であらう。征韓論と云へば單に朝鮮問題のやうに考へられるが、南洲が朝鮮などを終局の目的にしてゐない事はあまりにも明らかだ。彼は明治六年官を辭して故山に歸臥してからも、人を派して支那事情を視察せしめて居る。其の南洲が、或時外國使臣の宴席に呼ばれ、初めて西洋料理と云ふものを御馳走になつた。いづれ三條公初め大久保、木戸など云ふお歴々が居並んで居つたであらうが、皆西洋人に習つて箸を、否ホークとナイフと云ふ奴を握つては、禮儀を亂さぬ樣にやつて居た。處が、西郷一人は勝手に手づかみでムシヤ〳〵と喰つて仕舞つた。これなどは慥かに相當の心臓振

りである。維新の功績は云はずもがな、彼をして志を得さしめたならば、日本の大陸政策は、恐らく九・一八を待つまでもなかつたであつたらう事は、想像に難くない。だが、この邊の歴史は、まだ〳〵血のしたゝる生々しきがある。從つてこゝで論及する要もあるまいと省略し、再び元寇の昔に返へらう。

四

世界史に最も赫々たるものは、昔はアレキサンダー大王の東征、近くはナポレオンの歐洲統一を擧げずばなるまい。だが、それにも增して華やかなものは、何と云つても東西兩洋を股にかけ、殆んど世界の全土を統一した蒙古帝國華やかなりし頃の出來事だ。目に火あり面に光ある成吉思汗を始祖とし、其の子太宗、其の子定宗の時代である。彼等はコーカサス山脈を越えて歐洲を席捲し、北はロシアよりポーランド、ドイツ、オーストリーより、バルカンの近東諸國並にイタリーの一部迄攻め入つて、殆んど歐洲全土を平定した。從つて定宗の卽位式が外蒙古の平原で行はれた時は、支那は元よりロシア、フランス、イ

タリーを初めとし、ローマ法王すら特使を派して親書を奉呈した。その元の使者、杜世忠以下五人を龍の口に斬り、明らかに日元國交の斷絶を宣明した相模太郎時宗の心臓は、受動的ではあるが、相當に買つてやつてよからう。尤も私かに聞く處に依れば、若年の時宗相當の程度に神經衰弱に陷ち入つたが、偶々元に滅ぼされた支那の禪僧が、鎌倉五山に居て、江戸の仇を長崎式に、時宗をけしかけた結果、遂に時宗も此の決心に迄到達したと云ふ人もある。が、兎も角も、東西の兩洋を股にかけ、勝利と征服の絶頂に立てる忽必烈の威嚇に對し、嚴然として國家の尊儼を示した若き時宗、本朝强心家列傳の中に加へて正に然るべきであらう。されば伊豫の武士河野通信、我こそは敵陣に一番乘りをせんものと、十枚の起訴文を氏神の神前に鵜飲みにし、待つこと八年、弘安の役、帆柱を傳つて敵船に跳り入つた等は、時宗の氣魄の必然なる影響とみてよい。

五

「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」と四面海を巡らした大和島根の男子等が、水を

征服する力はロスアンゼルスやベルリン以來のオリンピツクに天晴れ無敵水上軍で幾度か國歌君が代を吹奏させただけではない。吾々は先づ倭寇の目醒しき活動振りを讃美せねばならぬ。黑潮の荒波を眞直に受ける潮岬、紀州や、瀨戸內海沿岸地方の舟人は能く小船をあやつゝて大洋を征服した。所謂御朱印船が支那沿岸より更に南して安南・シヤム・ヒリツピン方面に手を延ばした史實は日本民族史の上に特筆すべきである。

慶長十四年(西曆一六〇九年)池田輝政は長さ百六十七間の船を造り、寛永十二年には幕府が長さ六十間の船を造つて居る。京都の商人田中勝介はコロンブスに遲れる事百十餘年ではあつたが、太平洋の荒波を横切つてメキシコに到達した。當時御朱印船がハワイの諸島や又南洋の諸島に往來し、その海上權を征服して居た事は正に記憶すべき事だ。天正年間原田孫七郎が呂宋(ルソン)よりマレイに入り、スペイン語を習得し秀吉に勸めて南洋經略を意企せしめ、遂にヒリツピンの大將ダスマリニヤスに秀吉から降服勸誘狀を送つたなどは實に愉快である。「若し速やかに匍匐膝行し來つて降服せざれば、早速征比の軍を差しつかはすであらう。後で悔を殘さぬやうにしろ」等の文句は相當な心臓だ。文錄初年泉州堺の豪

商助左衞門が、壯士百餘人を引きつれて呂宋を征伐し、金銀財寶幾多を船に積んで歸つて來た等は、昔話の桃太郎を地で行つた例に過きない。安南貿易に從事した荒木惣衞門は王女を娶つて西部順化に出かけ、シヤムでは例の山田長政が大活躍を演じた事は餘りにも有名過ぎる。小笠原諸島はその名の示す如く、小笠原貞賴が文錄三年七月二十七日に發見したのだ。伊達正宗に仕へた支倉常長が遠くイタリーに行つて大いに歡迎された事も記錄さるべきだ。實に日本民族の南進を、今頃云々するなどは遲過ぎる。ジヤワ、スマトラ、ボルネオ等々、何時日本がお買ひ上げになるのかと首を長くして待つて居る筈である。さるにても心臓の強い人は何時の時代にも要求されるものだ。

六

舞臺が段々小さくなつて國内的になるのは少し心細い。然し心臓の強さは、單にその活動の空間性のみによつては決定されない。生物の特徴は順應性にある。若し之を國際的舞臺に置けば、前述せる處か、若しくは夫れ以上にも活躍したであらう人物は少くない。今

その二、三を拾つて見やう。先づ源平の時代を眺めると、この邊で線の太いのは何といつても大島に流された爲朝であらう。「我は九州總追撫使である」と、十三歳にして九州一圓を征服したなどは相當なものである。父義朝が彼の不始末の爲めに檢非遣使の官を解かれたと聞き、彼は親孝行にも、自らの罪を乞はんとノコ〳〵東都に上つて來た。さて京都に上つて見ると折から保元の亂だ。凡そ買つた喧嘩で、歴史上、これ程華々しいのは餘り見當らない。爲朝は西の門を引受けてやると、僅か廿八騎の家來で御所の西門を固めた。嚴島神社の神殿造營の際、落ちる夕日を暫く待てと、扇で呼びとめた清盛なども相當の心臓の持主であるが、その清盛が西門に出かけて見ると、爲朝の一矢、伊藤五の胸板を貫いて、續く伊藤六の小袖に立つたのを見て、流石の清盛も、俺は何にも西門を攻めろと勅令を受けた譯ではないと、うまく爲朝を忌避して別の門を攻めた。爲朝が、兄義朝の兜射貫き、勢餘つた矢は寶藏嚴院の門の扉にグサツとさゝつたのは此時である。爲朝の面目は、別に其處で戰はなければならぬ義理があつたわけでも無く、ヌーボー式で人の喧嘩を買つたその線の太さである。

男だけでは片手落であるから、女流强心家列傳に數へられさうなのはと物色すると、巴御前では武勇傳だけで物足りぬ。七百年の幕府の基礎を礎いた頼朝の女房政子等は、糟糠の妻でもあつたが、一方頼朝ほどの亭主を相當尻に敷いた上、その政治的手腕も相當に認められる。先づ以て强かな女流强心家であらう。

信長も亦不世出の英雄であつた。光秀のためにあへなき最後をとけたのは何となく惜しい氣がする。彼は十六で父信秀の後目を繼ぎ、その葬儀の日、袴もつけず、ボーボーたる頭髪のまゝで長柄の刀を佩き、參會の人達があきれ返つて居るのには目もくれず、佛前に出てクワツとばかり抹香をつかんでは投げかけたまゝ歸つて仕舞つた振舞などは、氣狂ひかと思つて居ると、いざ立ち上つた桶狹間の一戰に、見んごと義元を滅ぼした電光石火の手なみ、正に仰天すべきものであつた。

結　言

與へられた頁が過ぎた。近代に於ける强心家列傳は之を省略し、茲に結言のやうなものを附け加へて置かう。

そもそも心臟は個體の生命と運命を共にする最も重要な身體の機關である。從つて心臟の力は生命力であり生物力であり又人間に卽すれば人間力とも云ひ得るであらう。全身を形づくる細胞の一つ一つに榮養を又ホルモンを供給し、一方その老癈物を運び去る之悉く心臟の働きによるのである。それのみではない、喜怒哀樂之を心に感ずると雖も、一々として胸にときめく。故に之を心の臟と謂ふ。

人は、興奮狀態に置かれ、乃至は死生の境地に直面すると火事場で簞笥を持ち出すやうに、匹夫と雖ども案外の働きをするものである。だが、眞の働きはその靜常な狀態に觀察されねばならぬ。泰山前に崩れて胸ときめかぬ心臟は、運動家の心臟と同じに、たゞ鍛錬によつてのみ得られる。理論でなく實踐である。秀吉の心臟は秀吉の體驗に於て、南洲の心臟は南洲の鍛錬に於てのみ得られる。眞の凉風は汗を流して初めて味はれる。凡そ生物に於ける生理學的根本原則は、四肢の筋肉と同じく、使はるゝことに因つてのみ力を增し使はざれば卽ち衰へる。茲に人間的な能率はその積極的な點に於て消極的なる機械的能率

と根本的に相異する。機械文明が高揚すると、やゝもすれば、機械的能率主義を以て人間を律せんとする。蒔かざる種を刈取らんとすると同樣に、夫れは永遠に不可能だ。「要領よく」と云ふ二點間の最短距離を行かんとする安つぽい機械的能率主義を、根本的に打倒し去らねばならぬ。

かくて日本人の心臓は、元々菜食で強いのだから、こゝに人間的能率主義を以て鍛錬すれば、素晴らしい心臓になる。その鍛錬風景は流れに棹して下る舟の如くでなく、風に抗して高揚する凧の如くでなければならぬ。

心臓の働きを初めて觀察したのはレオナルド・ダヴインチである。其働きを實驗的に明らかにしたのは近代生理學の鼻祖ウイリアム・ハーベーである。「本朝强心家列傳」に科學者を漏らさねばならなかつたのは洵に殘念であつた。だがもう一世紀を出でぬ内に、必ずやその列傳が出來るであらう。

〔昭和十二年六月日本評論に掲載〕

科學と民族

定價 金貳圓

昭和十二年十一月一日 印刷
昭和十二年十一月五日 發行

見本

檢印

著者 浦本浙潮

發行兼印刷人 京都市河原町二條下ル 渡邊久吉

—(辻製本)—

發行所 京都市河原町二條下ル 人文書院
振替 東京二八四五九番 大阪六二一六三番

東京帝大教授
醫學博士　永井　潛著

道と自然

菊判四三〇頁・價四・五〇・送〇・一五

東洋哲學の源流、老子は「道は自然にあり」と云ひ、又、近代哲學の大祖カントは「道は人にあり」と云つてゐる。「道と自然」は兩者の何れでもなく、それを止揚したものである。「自然觀より人生觀へ」から更に一歩を進んだものが本書だ。

東京帝大教授
醫學博士　永井　潛著

五版　自然觀より人生觀へ
—ザインよりゾルレンへ—

四六判四七〇頁・價三・五〇・送〇・二一

醫學者であり、哲學者たる博士の研究は、その思想の圓熟と相俟つて素晴らしい進展をみせてゐるザイン（存在）よりゾルレン（當爲）へ—博士は斯く叫びつゝ全く無人の境を行くやうな濶歩をつゞけ る。本書は最近の醫學・哲學を論じた人生論であり、生命論である。

東京帝大教授
醫學博士　永井　潛著

五版　人及び人の力

四六判三八〇頁・價一・八〇・送〇・一五

天地に偉大なるもの多しと雖も「人の力」に如くなしと大哲ソフオクレスは喝破す著者はこの偉大なる「力」を生活現象に即しつゝ生命の醫學・哲學・健康と凡ゆる方面に亘つて詳叙してゐる。蓋し醫學書であり同時に哲學書だ。

東京帝大教授
醫學博士　橋田邦彥著

重版　自然と人

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は自然科學者であり同時に哲學者たり更に、佛教に造詣深いことは夙に識者の知る處である。その言々句々には巾廣き厭力を讀者の肺腑に感ぜしめ、然もその壓力のもと道と人に對して、不斷に燃え盛る蕭然たる愛と眞理を見出すであらう。

發兌　人文書院
京都市東山區河原町二條下ル　振替大阪八二六六番

三版

慈恵醫大教授 醫學博士 浦本浙潮著

生命の第四原理

四六判五四〇頁・價二・五〇・送〇・二一

生理學界の權威、浦本博士の博識は既に定評がある。本書はそれを裏書するに相應しい書だ。内容を「哲學」「隨想」「評論」「紀行」の篇に分つ。その頭腦の透徹は晃天の如く、行文の妙味は全く獨自のもの、樗牛、鷗外、漱石の三者を打つて一丸としてそれに新思想を盛つた感がある。

重版

慶大醫學部助教授 醫學博士 林髞著

刺戟

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は神經生理學者の專攻者で、ソビエットに留學して歸つた新進學者のだ。自然科學者のうちで、隨筆家として一異彩を放つてゐる。博士の隨筆と生理學解説とを蒐めたもので、その若々しい筆致興味深い解説、野心ある思索は實に著者の獨壇場

慶大醫學部助教授 醫學博士 林髞著

思想と生理

四六判四〇〇頁・價二・二〇・送〇・一五

世界の至寶とされたソビエットの大生理學者、故パヴロウ教授門下の俊逸であり、日本に於ける唯一人者慶大の誇りとする新進學者だ。のみならず今やその文名は嘖々として文藝界に華々しい活躍をつゞけてゐる著者の最近の隨筆集である。

日大教授 醫學博士 内山孝一著

涓滴集

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

新進の生理學者として、又ペンの人として夙にその名を知られてゐる逝水・内山孝一博士の專門外の第一著である。日大、昭和醫專等に教鞭をとりつゝも、尚ほ橋田教授のもとに研鑽を重ねつゝある學究者である。啓蒙隨筆として世にすゝむ。

發兌 人文書院 京都市右京区都ヶ谷大河原町二番地 電話下京区二条通六番地

宮川曼魚著

花鳥風月

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は江戸趣味の濃厚な人であり、同時に江戸時代の研究者だ——花に鳥にとりどりの趣あり、風に月に、つきざる味はひのある隨筆集。清新にして幽婉、平明にして情趣ゆたかなる内容。その二十四章のいづれもが吾々の生活に卽した尤も手近な話題であり、感興である。

醫學博士 式場隆三郎著

文學的診療簿

四六判三一〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

わが式場博士を有名にした初めての書だ。本書は精神病理學者として、又文藝家として一人二役の隨筆集だ。然も本書は神經系統諸病者にとつては療病隨筆ともなる。

三版

慈恵醫大教授 醫學博士 浦本浙潮著

旅心常住

四六判三七〇頁・價二・二〇・送〇・二一

著者浦本博士ほど旅を愛し、旅に徹底する人はない。かしこに俚謠をもとめ、こゝに歴史趣味を漁る鹿爪らしい教授や博士の肩書を、かなぐりすて一管の愛竹を腰に旅愁を慰む。旅心常住！これぞ博士の旅に對する至純な心境でなくて何であらう。

慈恵醫大教授 醫學博士 浦本浙潮著

漫筆七部集

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

本書は題名の示す通り、著者が最も得意とする隨筆を七部門に分ちて收めたもの、その行文の流麗含蓄する多彩の趣味は、愈々冴えその筆致は益々油が乘つて、光彩陸離たるものがある。浦本イズムの低徊趣味樣溢せるもの。

發兌 人文書院 京都市右京区都ヶ谷大河原町二番地 電話下京区二条通六番地

慶應大學教授
醫學博士 藤浪剛一著

東西沐浴史語

菊判四五〇頁・價四・五〇・送〇・二一

二十年の研究と莫大の費用をかけて東西に亘る沐浴（風呂）に關するものを蒐集し、これを系統的に叙述したもの。日本に於ける沐浴の最高權威書である。圖書愛好家、好事家の唾涎する書だ。

大谷大學教授
泉芳璟著

印度漫談

四六判四三〇頁・價一・五〇・送〇・一五

「光は東方から、法は西方から！」—印度は實に精神文化の搖籃の地だ、この神秘の國を縱横に解剖したのが本書、その内容は植物、動物、風俗神話、佛跡、文學に亘り、然も一般讀者に興味を與へる爲の漫談の形で叙述す。

侯爵德川義親序文
阿部德藏著

奇術隨筆

四六判・價二・〇〇・送〇・一五

德川侯の序にある通り、阿部氏は奇術即藝術と考へてゐる。アマチュア奇術家であり、同時に學者だ。そしてその妙技は、畏くも幾度か台覽の榮を擔つたのだ。それ故に餘興や興業には絶對に出場せぬ。本書は學者として、藝術家としての阿部氏がその蘊蓄を筆にしたものだ。

五版

帝國美術院會員
日本美術院同人
富田溪仙著

無用の用

四六判二八〇頁・價二・五〇・送〇・一五

綺羅さながら星の如き現代畫壇にあつて、最も天才的なのはわが溪仙氏だ。それは獨り繪のみに限らない。その文、その書、その詩悉くが高逸であり同時に奇逸、風騷だ。特にその文章は形態に着せず。獨自のもので一種の禪語錄を讀む感がある

發兌 人文書院
京都市振替
河原町大八
二條下ル
六蓙番

金澤醫科大學教授
醫學博士 古屋芳雄著

民族問題をめぐりて

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

醫學者にして、同時に筆の人である博士が、筆を擱ぬて幾年。その間只管專門に精進してゐた著者であるが所詮は筆を取らずに居られぬ。即ち本書は、著者は生物學者、衞生學者としての隨筆集であり、同時に論文集だ。

慈恵醫大教授
醫學博士 石川光昭著

バクテリヤと人生

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

人生の最も强敵は何か。勿論、それは病氣であらう。就中、肺病、コレラ、チフス等々のバクテリアに依る病氣だ。われ〳〵は必然的にバクテリアに對する知識の常備を要する。即ちその豫防法を教へたもので本邦に於ける唯一の書だ。

十版

京大講師
醫學博士 巴陵宣祐著

人類性生活史

四六判三三〇頁・價一・二〇・送〇・一五

アダムとイヴ時代から、今日に臻るまで人類を一貫してゐるものは性慾の外ない。これを文化史的に興味を中心として叙述したものが本書である。或る意味に於て餘りにエキサイタテイブかも知れない。性生活を描いてこれ程擴範なものはない。

重版

京大教授
醫學博士 小南又一郎著

犯罪心理講話

—並に證人犯人の訊問要領—

四六判三〇〇頁・價一・八〇・送〇・一五

人は十人寄ればその顏が盡く異つてゐるやうに、その心理も凡て違ふ。況んや常人でない犯罪人をや。この犯罪人の心理を、實例をもつて說ゐたのが本書で「實例法醫學」と姉妹篇をなすものである。

發兌 人文書院
京都市振替
河原町大八
二條下ル
六蓙番

再版

醫學博士森田正馬序
醫學博士　宇佐玄雄著

說得療法

四六判三五〇頁・價一・五〇・送〇・一五

說得療法――醫者や藥に見放された患者が、宇佐博士の說得療法でケロリと癒る。如何なる療法かたゝ。病人を說得すればよいのである、これは、一般家庭で應用されたなら、まことに重寶な療法である。

昔から「胃腸・肋膜・肺・サヨーナラ（死ぬ事）」と云ふ古諺がある通り、胃腸病は凡ゆる病氣の始まりの感がある胃腸さへ丈夫なら他の病は恐るゝに足らぬ。本書は胃癌を始め凡ゆる胃腸病の養生の療病と養生を懇切に教へたものだ。

三版

京大教授清野博士序
醫學博士　平野啓司著

胃腸と療養

四六判三〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

四版

神月徹宗禪師
多田醫學博士　推奬山縣正明著

禪と療病

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は醫師に非ずと雖も、之を現代醫學の立場より見て一點の誤謬を指摘する事能はず、又其療病心得の微に入り細を穿つ處、寧ろ醫師の言はんとして言ひ得ざる處を多分に藏するに驚かざるなり

――多田醫學博士序の一節――

重版

京大教授
醫學博士　今村新吉著

神經衰弱とヒステリーの治療法

四六判二二〇頁・價一・〇〇・送〇・一五

人間の心理及び異常心理を通じ神經衰弱及びヒステリーの原因と症候とを解釋し、進んで治療にまで及ばれたのである。佛蘭西文、獨逸文の發表はあるにしても邦文を以つて通俗的に博士の說を纒めたるは本書あるのみ。

發兌　人文書院
京都市東山區大和町二條下ル
振替二壹六番

藤浪博士序文
野村瑞城著

療病と迷信

四六判三〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

醫學醫術が發達したといふに何故に病氣治療に關する迷信は多いか？本書は此疑問に答へ、次で禁厭、九字、病占、加持、祈禱、憑靈、神がゝり等其他の諸現象より療病宗教團のなす所等を暴露し批判し、更に精神的、科學的なる假面を冠る迷信を解剖してゐる。

福來博士論攷附載
清水正光著

健康增進呼吸哲學

―ヨギの强健呼吸法―

四六判三〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

世には健康法の書籍が汗牛充棟も啻らぬ程である然もその多くは非科學的で、醫學者がみて噴飯に堪へぬものが多い。が、本書はヨギ哲學の延長として極めて科學的であり、その方法も簡單で病者（肺病の如き）も、健康者も容易に目的を達することが出來る。

四十一版

小酒井博士序
野村瑞城著

疾病療養白隱と夜船閑話

四六判・價一・五〇・送〇・一五

「これが嘘なら拙者の首を斬り去れ」と迄保證した、疾病療養の奥義たる內觀の秘法を詳述したもの、曾て肺患に惱みそれを克服した小酒井博士は世の病者が一日も早く本書を讀んで病苦から解放されよと云ふ。

小酒井博士序
野村瑞城著

白隱と遠羅天釜

四六判三〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

本書は「白隱と夜船閑話」の續編で、白隱が「夜船閑話」に叙した療病、療養を體驗發表したものだいはゆる「長生久視の大神仙」たる方法を明示してゐる。「遠羅天釜」（オラテガマ）は實に「夜船閑話」と東の兩輪をなし、更に一歩を進めたものだ。

發兌　人文書院
京都市東山區大和町二條下ル
振替二壹六番

京大教授醫學博士
舟岡省五校閲　內島昌雄著

結核豫防治療諸問題を正視す

菊判四〇〇頁・價三・五〇・送〇・二一

從來肺病だけの書は多いが、結核諸病を網羅した書は本書が嚆矢である。著者は結核の臨床家として五十年、曩に文部省よりも歐米へ派遣された斯界の重鎭だ。科學的であり、精神的である正しい治療を敎へる。

慈惠大敎授
醫學博士　森田正馬著

健康と變質と精神異

四六判四三〇頁・價二・五〇・送〇・一五

本書は標題の示す通りの通であるが、博士獨自の研究になる分類であり、その學說を盛つたもので健康者は云ふ迄もなく、變質、精神異常について興味深く、且つ修養上にも卑益する樣書かれた、此種書物としての初めての試みである。

五版

慈惠醫大敎授
醫學博士　森田正馬著

赤面恐怖の療法

—對人恐怖治療法—

四六判三六〇頁・價二・五〇・送〇・一五

「恥しがりや」「小膽者」「人前に出ると顏が赤くなる人」等々は從來名醫名藥をもつてしても癒らなかつたのを、博士が神經質病理を發見されて以來完全に治療し得るやうに成つた。即ち、日本に唯一の治療書である。

慈惠醫大敎授
醫學博士　森田正馬著

神經質療法への道

四六判三三〇頁・價二・五〇・送〇・一五

神經質、神經衰弱症の人々が、凡ゆる醫者に、療法に失敗して、最後に博士を賴つて完全に治癒し現に社會の優位にある人々が、全治の喜びの會を組織して、全快の過程を詳に述べ、博士の批判と療法への道を忌憚なく叙べた療病書。

發兌　人文書院
京都市右京都替
河原町二條下ル
振替二六八番

慶應大學敎授
醫學博士　川上澌著

寒燈

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一〇

世に隨筆書は多い。けれどもほんとうの隨筆と云へるものが、果してどれだけあらうか。著者は前年隨筆「斷弦」を出して、洛陽の紙價を高からしめ、隨筆の醍醐味を鮮明して、讀書界に一大センセイションを與へたる人。この人にしてこの著あり。と云ふべきである。年に四季あり然も三伏の暑來らんとして寒燈を世に送る何のアレゴリーぞ！

大阪朝日新聞
論說委員　藤田進一郎著

時代を歩む

四六判三五〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

生馬の目をぬく世界隨一の大都市ニューヨークの特派員として、令名を馳せた著者は、今や大阪朝日の「新知識」として「頭腦」として論說委員として活躍してゐる。本書は著者の該博な智囊と、趣味の豐富を雄辯に物語る。

東大助敎授
文學博士　金田一京助著

學窓隨筆

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

親友であつた情熱の詩人石川啄木のパーソナリテイヲ左右する偉大な影響を與へた金田一博士の隨筆集。博士の隨筆ほど迫力あるものはない。その中等學校敎科書に轉載されてゐるものなどは、何れの學生も涙を流して讀むと云ふ。もつてその內容を知ることが出來やう。

飯島曼史著

見る讀む想ふ

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

神戸の商大敎授から、大朝論說委員に轉向した、學者であり同時にヂャーナリストだ。下村海南博士と共著の「南遊記」に依り、その滋味豐な行文を喧傳された著者。本書はその著者を知ることが出來る得意の隨筆集である。

發兌　人文書院
京都市右京都替
河原町二條下ル
振替二六八番

大阪毎日新聞學藝部長論說委員　井上吉次郎著

手と足

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

曾て文化史を飾つた工人と、その作品を訪ねて、工人とその作品たる陶器を文化史的にみた趣味の隨筆集だ。陶器に興味を持つた人々は勿論のこと陶器に興味を持たぬ人にも興味ある書だ。

大阪毎日學藝部長「風に聞く」執筆者　井上吉次郎著

逆に

新四六判二五〇頁・價一・五〇・送〇・一五

夕刊短評のカテゴリーと云はれる大阪毎日新聞の短評欄「風に聞く」に名筆を揮ひつゝある筆者が最近十年間その感光板の如き鋭敏な頭腦に反映した諸々の社會相を描いたもの。眞のアンソロジー讀本であり、同時に社會、經濟、婦人讀本でもある

再版

慈恵醫大教授　醫學博士　森田正馬著

生の慾望

四六判四二〇頁・價二・五〇・送〇・一五

博士は、他面讀書家として、將た又博識家として醫學界唯一の定評がある。その博士が、生きとし生けるものゝ願ひ、生の慾望を根幹として、醫學、哲學、文藝を織り交ぜた隨想、隨筆集であり、知識の寶庫だ。お座なりに大學を出るより、本書を讀まれよ。

慶大醫學部教授　醫學博士　川上澌著

斷絃

四六判三〇〇頁・價二・五〇・送〇・一五

學者中の學者として、その風格を畏敬されてゐる博士は、他面漢籍詩文をよくし、陽明學に造詣深い。本書は博士が始めて發表した珠玉の文字である。その詞藻の豊かさ、趣味の高雅は「東京朝日」をして隨筆の王座と稱讃せしむ。

發兌　京都市河原町二條下ル　人文書院

大阪朝日論說委員「天聲人語」執筆者　釋瓢齋著

俗つれづれ

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

時に破邪顯正の斬馬劍を收め、貌姑射山に杖して俗腸を洗ひ、歴史を探り、彩管をとる。或時は僧堂坐禪し悟道に精進する等・聖・俗・併せ呑む然も、天縱の四辯八音たる皮肉、洗練されたユモールは、そゝ博覽强記詞藻豊富と相俟つて將に天一品だ。

これなら「瓢齋隨筆」と銘を打つても恥かしくいと、著者自身がとつておきの題名をつけた劃期的の隨筆集が本書である。得意の短章に得意の横說竪說は考證と相俟つて深根固柢、全く獨自の境地を拓いものと云へ。

大阪朝日　說委員「天聲人語」執筆者　釋瓢齋著

瓢齋隨筆

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

大朝に在籍二十三年、その半を論說委員として、論陣の最高峰に位し、日々「天聲人語」に依つて百八十萬讀者に呼びかけた著者が、昭和十一年九月二十六日を以つて停年引退した。「天聲人語」洵に感慨本書は瓢翁の紀念すべき一大モニューメントして世に送る。

大阪朝日論說委員「天聲人語」執筆者　釋瓢齋著

それからそれへ

四六判三五〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

「天聲人語」三千六百余篇中より、翁の明歴々、露堂々躍如たる黄金篇百二十余を描いて本書を成す。優婆塞瓢翁の八斗才は倜儻として、時に提唱し・時に誨へ、燮々たる光芒は太陽の如く、その光明は十方世界に遍照たり、これぞ翁が艾年の血と肉をもつてなる短章軌範でなくて何であらう。

大阪朝日論說委員「天聲人語」執筆者　釋瓢齋著

俗人語錄

四六判三一五頁・價二・〇〇・送〇・一五

發兌　京都市河原町二條下ル　人文書院

岸田國士著

時・處・人

四六判二四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

戯曲作家の第一人者岸田國士氏の隨筆集である。氏の文學はそのフランス風の輕快な文章と、ファン・ド・シエクルの憂鬱さがない處に、獨得の魅力がある。それ故に近代人は、氏の文學に通ずることに依り魂の綠地を發見することが出來やう。

荻原井泉水著

白馬に乘る

四六判二〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

白馬に乘る——如何にも夏の讀物にふさはしい。井泉水氏の文章はすでに定評あるものであり、ことにその紀行文は他の何より興趣が一段と深い、それは唯の文章の士でなく、優れたる俳人だからなのであらう。紀行隨筆中の白眉。

水野葉舟著

村の無名氏

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

關東震災で人生觀が變り、當時の天才水野青年筆を捨て房總の一寒村に無名氏として土に親んで來たが、そのつれづれにものした小品を蒐めたものが本書だ。自然主義華かなし頃、天才作家と謳はれた著者が、十數年振りに世に問ふ珠玉の文章だ

中河與一著

文藝不斷帖

四六判四〇一頁・價二・〇〇・送〇・一五

創作家としては、純文藝陣に萬たき姿を瀾歩し、論壇では得意の偶然論を振り翳して論陣を席捲しつゝあるのが、わが中河與一氏である。それを裏書するもので、創作よりも何よりも中河氏を知るにもつともよい。

發兌　人文書院
京都市振替
河原町二條下ル
大阪市
二十八番

河井醉茗著

南窓

四六判三三〇頁・價一・八〇・送〇・一五

詩壇の元老であり、同時に文壇のペタランである著者自選の隨筆集である。本書は唯だ詩人としての隨筆に止らず、文壇五十年の回顧錄であり、プロフヰールでもある。詩人らしいデリケートの筆は、幽谷の谷間の蘭の樣な氣品を持つ。

池谷賞作品

保田與重郎著

英雄と詩人

四六判三三〇頁・價一・八〇・送〇・一五

文藝評論界の新人として、新浪曼主義を高揚しつゝある著者の處女出版である。本書は發表當時著者の批評者としての位置を一歩一歩確實にした名評論のみである。その批判の犀利と俊鋭、スケールの大きいことは流石新人中の白眉だ。

醫學博士
岡田強著

文明と狂想

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

文明と狂想は一種のコントラ・ブンクトだ。現代人は多かれ少かれ、何等かの狂想曲を奏でてゐる精神病學に於ける新鋭の士、岡田博士が多年の蘊蓄を吐露し、世の態を文學的興味深く叙したのが本書だ。

大阪毎日調査部長
石川欣一著

ひとむかし

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

隨筆家として、新聞界に並ぶものなき著者が、或る時はロンドンにニューヨークにと特派員として第六感を活躍させ、得意の快筆で讀者を魅了したことは世人周知のことだが、本書は歸來日本は勿論歐米の見聞を隨筆したものが本書だ。

發兌　人文書院
京都市振替
河原町二條下ル
大阪市
二十八番

佐藤潔著

玩具と緣起

四六判四五〇頁・價三・八〇・送〇・一五

玩具の蒐集家であると同時に、玩具を系統的に研究してゐる唯一の學者である。本書は玩具の持つ醫學的役割、迷信的役割を、全國六百種のものに就いて叙述したもの。好事家は勿論、玩具蒐集家の指導書として、座右に、旅の鞄に、入れられ度い。圖版數百挿入。

木下桂風著

松籟

四六判三〇〇頁・價二・五〇・送〇・一五

吾々日常生活の起居進退、一擧一動、雅趣禮文、萬端を一貫するところの綜合藝術は、この茶道による洗練と、永い傳統との啓示を得てゐること幾何か。この東洋の古典藝術の茶道を文學的に紹介し隨筆的に提唱したものが本書。

大阪時事美術部長 渡邊虹衣著

お茶と花

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

「お茶と花」——本書の題名が示す通り、お茶に關する隨筆、考證、主に花に關する隨筆と考證である。そして茶に關する器物、花に關する器物とそれ〴〵の骨董品の値段を參考に記してゐる點は他に例がない。著者渡邊氏は關西に於ける美術骨董界の元老である。

坂井末雄著

賴山陽詠史の詳釋

菊仕載判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

德富蘇峰題詩、賴山陽の詠史は夙に日本精神發揚の恰好のものとして、普く稱讃されてゐるものであるが、これを解り易く詳釋したものが本書である。實に本書は朗吟の教本としても好の書である。

發兌 人文書院
京都市大原八瓶町二壹番地 振替二條六下參ル

京大教授理學博士 近重物安著

野狐禪

四六判三二〇頁・價一・五〇・送〇・一五

收むる所「崇佛の本旨」「お悟り」「禪と科學」「麻三片」「禪說」「偶感」等の外、詩を說き併を語り、畫を謂ひ、詩禪一味、輕快によく王三味の端的を擧し、月並宗匠の死禪話輕はなく時にまた諷刺縱橫巧みに其信念と心境とを披瀝す。

京都帝國大學名譽教授・理學博士 近重眞澄著

雪だるま

—附錄禪林世語集—

四六判三七〇頁・價二・五〇・送〇・二一

禪堂は勿論のこと陸軍海軍の將校連から、各專門學校そして一般には、ラヂオ放送に—と到る處で嘖々の好評を博した禪話、殊に信心銘講話は、最近天龍寺僧堂に於て講じた。博士の最も自信に盈つるものだ。

大阪朝日論說委員「天聲人語」執筆者 釋瓢齋著

十七版

白隱和尙

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

白隱和尙の史實を經として、得意の禪海秘密の暴露を縱として、これを小說風に書ゐたものが本書である。いはゆる公案禪の如何なるものであるかは本書に依りて瞭となつた。德富蘇峰が激稱して曰く「本書は白隱に關する書中の書であらう」云々

近重物安博士題字 野村瑞城著

澤庵と不動智の體現

四六判四〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

禪門の巨人澤庵は又近世國民思想史上の一人者であり、宮廷の歸依を得、且つ三代將軍家光の精神上の師であつた！ 殊に澤庵が柳生但馬守に與へた「不動智神妙錄」の一卷は劍の神秘に托して不動心の極意を啓示せるもの。

發兌 人文書院
京都市大原八瓶町二壹番地 振替二條六下參ル

イエ3G
-25

醫學博士 西川義方著

澄心記

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

内科の權威であり、同時に溫泉研究の第一人者たる博士は、侍醫として夙にその名を知られてゐるが、他方、筆の人としても刀圭界の第一人者であることは周知の事實だ。その博識と趣味の豐富を覗へる書。

京大教授
醫學博士 清野謙次著

踏まぬ影

四六判三〇〇頁・價二・五〇・送〇・一五

三尺を離れて師の影を踏まぬ博士が、古今絶無の毒婦高橋お傳の然も「陰部」を生理學的・解剖學的に縱横に研究してゐる。更に興味深きは博士がいかめしい大學教授であり。解剖學者であるところに、拍車的な魅力を藏してゐる。

發兌 京都市右京區大河原八町瓦二壹條六下參ル番 人文書院

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black